異世界の危機

官崎龍牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界の危機

【Ｎコード】
Ｎ１２５０Ｐ

【作者名】
官崎龍牙

【あらすじ】
「お前には魔法の素質がある。俺と一緒に来い。」
自分の主張を何一つ言えないまま拉致された主人公が異世界の危機を救うべく、同じように拉致されて来た（やっぱり自分の意見は何一つ言えて無い）仲間と戦う物語。
魔法がほぼ何でもアリだったり、アニマロイド（改造動物）がいたりなど、色々現実からカッ飛んでますが、ファンタジーならではだ

と思ってください。

残酷な表現ありのタグとＲ１５のタグをつけました。

最近馬鹿ばっかりやっているのが自分でも否めない。

最近更新不安定気味。でも頑張る。

プロローグ

～プロローグ～

ようこそ。異世界へ。この異世界は基本的な事はあなたがたが住んでいる世界とは何のちがいもありません。

何が違うかって？では教えましょう。それは……。

“魔法”が使える事。

今、この異世界には、この魔法で世界征服を企む奴らがいるんですよ。このままではその人達に乗っ取られてしまいます。

しかもその人達、目玉が飛び出る程強く、一般人では手も足もでません。

しかし、あなたがたの住む世界にもいるんですよ。生まれつき魔法の素質があり、一般人よりずば抜けて強い人が。

もちろん、魔法はその世界では使えないし、一般人を凌ぐ強さも発揮出来ません。

あくまでこちらの世界での話。

で、その人達をこの世界につれていき、悪い奴らの陰謀を止めてもらいます。

……。え？そんなの自分たちでどうにかしろ？

お気持ちはわかるのですが、こちらだけではどうにもなりません。

それに、もしこちらの世界が征服されたら、今度はそちらの世界に奴らがきます。

決してこちらだけの話ではないんです

わかりましたでしょうか。いや、わかってなくとも時間はありません。もう物語は始まります。

おや、もうあなたがたの世界の人達が数名、こちらにきているではありませんか。

さぁこの物語、スタートです。ごゆっくりお楽しみください。

第1章　旅の始まり（前書き）

プロローグでしゃべってた人は忘れてください。この世界の説明してただけです。

第1章　旅の始まり

どこまでも続く荒野を歩き続けている。
なぜこんなことになったのか、どうやったら帰れるのか、まるで見当がつかない。
分かっているのは俺は自分の住んでいる所とは違う場所に拉致されたこと。
そして、すぐには帰れせてもらえない事だ。
なぜ俺がこんな事を……。俺が世界を救う？なぜ俺がＲＰＧの勇者よろしくそんな事をしなければならんのだ。
自己紹介が遅れた。俺の名は力イン。カイン・セプル。２日前まではこんな生活とはまさに無縁だった。しかし……。

（２日前の事……。）

「行ってきまーす！！」

俺は母親にそう伝え、公園へはしっていった。友達に野球に誘われ、向かっていったのだ。今思えばこれを断っときゃあこんなことにならんかったのに……。
とにかく公園に着いた俺は友達とチームを決める為、ジャンケンをした。
自慢ではないが、俺は野球がメチャクチャ得意で（無論、プロには

かなわんが。）、

ほぼ全員が俺を欲しがっていた。

俺の入ってない方のチームは、すっげえ絶望の表情をしていた。そこまでならんでも……。

とりあえず試合開始。

いつもどうりこちらに飛んできたボールをキャッチすべくボールの真下にたつ。何でもないフライだ。こんなの簡単……。

のはずだった。普段の実力を出さずとも取れたのだ。これは決して言い訳ではない。

寝不足か、貧血か、急にめまいがしてボールはグローブの端っこに。

見事ボールはどこか草むらの方向にころころ転がっていった。

その間、相手のランナーは次々と点を入れ、あっという間に2対0。

「ち……、畜生ォォォーーーーー！！

しかし転がしちゃったのはしょうがない。

俺はボールを取りにいくため草むらへ。

確かこの辺に……。

お、あったあった。近くにいた猫がめっちゃこっちを睨みつけていた。

「ぶつけてくんじゃねぇよクソ……。」

あれ？誰がしゃっべった？

「どこ見てんだよ！こっちだこっち！」

「あれ……、猫が喋ってる幻聴が……。やっぱり寝不足かなぁ……。」

「ちげーよ！！幻聴じゃないんだよ！」

猫が話しとる。なぜ？

「……。というか、お前、俺が見えるのか？」

「いや、猫が見えないやつなど普通おらん。」

「よし、じゃあいっしょにこい！」

「待てコラ。なんでそうなる。」

「時間がねえんだ！！早く！！」

と言うと何か分からん呪文のようなものを唱える猫。

「な……、なんじゃこりゃあぁぁぁ！？」

青い渦のようなものがでできた……。

「この中に入れ。」

「え？……でも……。」

「いいから早く！！」

と押されて渦のなかへ吸いこまれた。

……。

気持ち悪っっっ！！

ジェットコースターに乗る時、腹がふわっと浮くような感じ、わかるだろう。

その感覚が3倍くらい酷くなったような感じだ。

従ってついたころには……。

「お……、おえっ……。」

完全にグロッキーだ。

しばらくして、気分が落ち着いたところで当たりを見渡す。

「どこだ……？ここは？」

辺り一面、見たこともない荒地が広がっていた。

第1章　旅の始まり（後書き）

今回は主人公が拉致された経緯を書きました。魔法は次回書きたいと思っていまーす。

第2章　襲撃（前書き）

戦闘あり、ただしグロい表現はありません。

第2章　襲撃

という訳で拉致されてきた俺は、どこまで続くのかよく分からん荒地を2日も猫と共に歩き続けているという事だ。

「おい、このクソ猫。」

「猫ではない。アニマロイド、No．157、COOD［CT］だ。」

……アニマロイド？ヒューノマイドが人造人間（よく分からんが。）みたいなのだから、こいつは人造動物？

「ということは、お前、機械か？」

「違う。元々は普通の猫だったが、改造されたんだ。そのため、話すこともできるし、普通の猫よりも数十倍強い。」

「すげーな。異世界の技術力。」

「ハッ。誤解するな。貴様の所の技術の進歩が、死ぬほどなってないだけだ。」

……そうか。遅いのか。確かにロボットもAS×MO（×は伏字）並みのレベルだからなぁ……。

「で、そこまで技術が進歩してる世界に住んでいるお前に質問。」

「何だ？」

「なぜそこまで技術進歩しとる世界で俺はネズミを生で食うという、食事をせねばならんのだ。」

……真似すんなよ。腹を壊す。

「しょうがねぇだろ。テメェが火を起こす魔法を使えねぇから……。しかし、お前
には、魔法の才能が無さそうだ。魔法の才能がある奴からは魔力を感じられるが、お前からは、ごく僅かしか感じられん。」

「悪かったな。才能無くて。」

「にしても、よく俺が見えたな。ここの世界の奴らをそっちの世界の奴が見るには、かなりの魔力がないといけないんだが。」

「……？どうい」

「ギェェェェェ！！」

何？今の声？上を見上げると体長４メートルほどのでっかい鳥がこちらを見下ろしている。

そしてこちらに飛んで来た。わー、カッコイー。

……。

いや、カッコイイとか言っる場合じゃなくね？俺達を食うつもりにしか見えなくね？

「うわぁぁぁぁぁ！！」

あの鳥がつかみかかってきて、俺達はなんとかかわした。

「このクソ…がぁ！」

キレた俺はその辺にあった小石を掴み、あの鳥に思いっきり投げつけた。

すると小石は奴の羽辺りに当たって、なんと羽を突き破って空の向こうへ飛んでいった！

「な……何だ今の……。」

「ギェェェェェ！！」

鳥が叫んだ。

「よし！！今だ！！」

ＣＴが叫び……そして……

「必殺！！ロケットパーンチ！！」

「えぇーーーーー！！？」

俺は思わず叫んだ。ロケットパンチできるなら最初からやれよ！！

ＣＴの前足が飛んでいき、鳥に当たり、そして……。

（ドッガーーーーーーン！！！）

……。

鳥、あっけない！！

そして猫！！ハンパねぇ！！

「さ、いこ。」

ＣＴが歩き出し、俺も慌てて歩き出した。

５時間後……。

俺は歩きながら考えていた。

さっきのものすごい力……。俺は無意識に魔法を使って小石をあの威力で投げ出したのか？

「おい、森が見える。あの森を抜け出せたら城だ。」

「……森を抜け出すのに、どのくらいかかる？」

「４日だ。がんばれ。」

くそ……あと４日も歩くのか……。

「足疲れた……帰りたい……。」

「なんだ、ホームシックか？」

「黙れ、無理やり連れてきやがって……。」
なんで俺がこんな事を……。
更に1時間後……。
森についた……。疲れた……。
しかし、頭上には果物(たべもの)が！！
「猫、取ってこい。いや、取ってきてください。」
「なんで俺が……。」
「うるせぇ！！選択権無視されて連れてこられたんだから、せめて、このぐらいしてくれよ！！」
疲れと飢えとホームシックとでイライラが絶頂に達した俺は猫を怒鳴りつけた。
「静かにしてよ。うっさいなぁ……。」
？今の声は明らかに女の声……？？
「こっちこっち。そっちじゃなくて。上よ上。」
上を見ると、小さな女の子が木の上から、こちらを見下ろしていた。

第2章　襲撃（後書き）

長くなりすぎました。すみません。木の上にいた女の子については次回。

第3章　出会い（前書き）

ヒロイン（ちっちゃい女の子）の名前決めるのに結構時間かかった。
ストーリー自体はあんまり進んでません。そのくせ無駄に長いです。
すいません。

第3章　出会い

その女の子はいきなり目の前に降りてきた。

「……もしかしたら、あなた、この猫に拉致されたの？」

「あぁ。そうだけど。」

黒い髪が肩まで伸びている。肌が白く、目がパッチリしていてとても可愛らしい。

……ロリコンと言われそうだ。この子、背が１４０センチもない。小学何年生だ？

「あの、君……。」

「ん？何？」

「君……小学何年生？」

とその瞬間、俺は首筋辺りを掴まれた。女の子はメッチャ怖い顔をしている。

「……今、何て？」

「え？」

「今、何て言った？」

「君、小学」

「私は高校生なんだけど。」

高校生？この子が？……背伸びしたい年頃なのだろう。でも胸はかなり膨らんでるし……。うーん……。

「あの～。正直にいってくれない？」

「いやいや、正直に言ってんだけど。」

「証拠は？」

「これ、生徒手帳。」

手帳を受け取り、見てみると、

「あ、本当だ。しかも俺より年上じゃん！！」

「あなた何歳？」

「１６歳。」

やばい、この子、俺より一つ年上だよ。にしても、１７でこの小さ……。

やべぇ、すげぇ可愛い。

俺は無意識にその子……いや、年上を“子”と呼んだらいけないか。その人の頭を撫でていた。

「年上の頭を撫でるなぁーー！！」

怒った。でも可愛い。

すっかり忘れてたが猫が女の子……いや、女の人に話しかけた。

「あんた、もしかして犬に連れてこられたのか？」

「うん、これに。」

というと彼女の後ろから犬が出てきた。

「おー。ＤＧ。見つけたか。」

「はい。簡単に。」

俺は猫に聞いた。

「知り合い？」

「うん。コイツもアニマロイド。」

この犬も人造動物……。

「はじめまして。アニマロイドＮｏ．１５９、ＣＯＯＤ［ＤＧ］です。」

おぉ。礼儀正しい。猫とは大違い。

俺は女の人に話しかけた。

「そういえば、君、名前は？」

「メレン。メレン？マチル。あなたは？」

「カイン。カイン？セプル。よろしく。」

俺はマチルさんに聞いてみた。

「あの、マチルさん。」

「メレンって呼んで。こっちの方が気にいってるから。呼び捨てでもいいよ。」

「じゃあメレン。君も城にいくのか？」

「うん。」

「じゃあ一緒にいく？旅は道連れともいうし。」

「いいけど……変な事考えてない？」

「お前に手ェ出したらロリコン犯罪者じゃねぇか！やらねぇよ！」

「私あなたより年上だからロリじゃないよっ！！」

……これから楽しくなりそうだ。

ということでロリ……いや、年上の女性と共に、城を目指すこと

にしたのだった。

と、その時、

「キャーーーーーーー！！」

な、何だ！？メレンの方をみると、

「アホかっっ！！」

俺はおもわず言った。なぜならメレンの目の前にすごく小さなクモがいたからだ。

「クモ大っ嫌い！！早くどけて……。」

「……。」

俺はクモを茂の方へ投げた。

「あ、ありがと……。」

よし、これでひと安心……。

「キャーーーーーーー！！」

……勘弁してくれ……。

結局、この森を抜けるまでの４日間、こんなことが続いたのだった。

……ハァ。

第3章　出会い（後書き）

主人公、ロリコンみたいですね。出来心です。なんかすいません。そしてロリ……じゃなくて、メレンさん、某ファミレス漫画にもこんな人いたし、、某腐女子も、某生徒会長も、ロリでした。ロリ多いですね。こんなキャラ、新しくありませんでした。

……次回はメレンさんの拉致された経緯でも話そうと思います。

第４章　経緯

（メレン視点）

私がこの世界に来たのは５日前のこと……。

高校から帰ってきた私は自分の部屋にカバンを投げてベッドに倒れこんだ。

この後塾だ……。めんどくさい。

「お嬢様、あと３０分で、塾の時間ですので、早く準備してくださいね。」

廊下にいるメイドが言った。私の専属メイドなのだが、どうにも口うるさい。

どうして私に専属メイドがいるかって？私の父親は、私が住んでいる町の町長なのだが、私をうざいほど溺愛しており、メイドを雇ったり、私をからかった人をいわゆるＳＰに始末させたり（殺す訳じゃなく、遠くから眠らせる。）、友達の男子に手を出すな、といちいち警告しにいったり、逆に迷惑だ。

無論、このメイドにも、私はあまり良く思っておらず、からかった時の反応が面白いため、そばにいさせてるだけだ。

もし面白くなかったら、今頃とっくに父さんに頼んでクビにさせている。

これから塾か……。私は行っても真面目に勉強せず、友達と喋ってばかりだし、大体小学生とからかわれてばっかしで、全ッ然面白くない。

あんな所行くより友達と遊んでる方が数百倍マシだ。

という訳で……。

「行きたくない。」

「ダメです！！私がお父様におこられるんですよ！！それに、きょうも、服のスカートものすごく短くされてすごくおこられたんですから！！これ以上勝手な事しないでください！！」

失敗。こうなったら……。

「ぐすぐす……（嘘泣き）、酷い……もうメリナ（メイドの名前）なんて嫌い！！」

「そんな嘘泣きしたって騙されませんからね！！さぁ、早く準備してください！！」

失敗。うーん、どうしよう。……。奥の手か……。

私はドアを開けた。

「やっと出てきましたね。さあ、おじょ……ーーーーーーーッッ！！」

私は睡眠薬（自分で調合したもの。無害。）をハンカチに染み込ま

せた物をメリアの口と鼻にあてて眠らせた。

「これ、お詫び。」

私はメリナのメイド服のポケット……あ、短くしたとき、まとめて切っちゃった。手に金貨を5枚握らせた。

よーし、これで外に遊びに行ける……。

「とでも思った？」

私は張ってあったロープに見事足を引っ掛けて盛大にこけた。

「……お姉ちゃん……邪魔しないでよ……。」

「だーめ。ちゃんと塾にいきなさい。」

私を足止めしたのは私の姉、サリノだった。

「いーじゃん！！お姉ちゃんも同じ事やって塾何回もさぼったんでしょ！？」

「アンタを止めないと、アタシが怒られるんだから！！」

私のせいで誰が怒られるとか、知ったこっちゃないっつの。

「別に行ったって、男の子からからかわれるだけだもん！！絶ッ対嫌！！！」

「はぁ……、どうしてこんなワガママになったのかしら。昔は素

直でいい子だったのに……。」

「私がワガママになったのは、絶対お姉ちゃんのせいだと思う！！」

そう、お姉ちゃんもこんなワガママなのだ。そんな人の近くにいれば、ワガママも移ると思う。

「……はぁ。疲れた。もういい。」

「行っていいの？」

「勝手にしな。お姉ちゃんは少し休むから。」

……ラッキー。

という事で外に出る事ができた私は、にぎやかな商店街に行く事にした。

アクセサリーショップで可愛いヘアピンを買い、上機嫌で町を歩いていると、

「やぁ、君。今ヒマ？」

なんか、金髪のチャラチャラした、男の人にナンパされた。機嫌が一気に下がった。

「君、可愛いねー。なぁ、どっか遊びにいかない？」

……うざっ！！

「ハァ？あなたその顔で堂々とナンパできるんですか？あなたの家に鏡は置いてあるんですか？私、あなたみたいな人大ッッ嫌いなんですけど。」

私はナンパした男に言い放った。

「て……めぇ！いい気になりやがって！！」

男が私の腕を掴み、どこかに連れて行こうとした。……よし、正当防衛だ。

私は男の弱点……足と足の間を思いっきり蹴り上げた。

「ーーーーッッッ！あーーーーーーーッ！！」

男は悶え苦しんだ。ざまーみろ。

私は走って逃げ、気がついたら町のはずれまできていた。

さて、これからどうしようか。

あっ、子犬だ。可愛いー。

私は子犬を撫でた

「あなた、私が見えるのですか？」

これが、全ての始まりだった。

第４章　経緯（後書き）

続きは次回。なぜか途中で入力できなくなってしまい、ここで終わりです。すみません。

第5章　拉致（前書き）

前の続きー。

第5章　拉致

「あなた、私が見えるのですか？」

「いや、普通見えるっしょ。」

「なら、私と一緒に来てください！」

「どこに？」

「異世界です。」

「……へ？」

私は意味が分からず、間抜けなかえし方をしてしまった。

「私が見えるのなら、あなたには魔法の素質があります。あなたは世界を救うため選ばれた人なのです！」

「私が……世界を？」

「はい、そうです。」

……何ぬかしてるんだこの犬。世界を救う？私が？何かの間違いだろう。

「申し遅れました。私、アニマロイドＮｏ．１５９、ＣＯＯＤ［ＤＧ］です。以後よろしくお願いします。」

「……はぁ。」

「では、早速行きましょう！！」

いつの間にか目の前に青い渦が。

「え！？ちょっと待って……」

しかし私は背中を押され、そのまま渦の中へ入っていった。

……。

気持ち悪ッ！！！

乗り物酔いの比ではない。私はとにかく吐きそうで、しばらく地面にうずくまっていた。

やっと気分が落ち着いたところで、私は辺りを見渡した。

見渡す限り木、木、木！ここは森の中のようだ。

「ここが異世界？」

「はい。ここは、グァムグの国です。この世界で最も賑やかな国なんですよ。」

「……私達の世界と何ら変わらないように見えるけど。」

「こちらの世界には、魔法が存在しています。あと、魔物が生息しています。」

「魔法って、私も使えるの？」

「心の中で念じれば、使えることができます。」

と聞いた私は何をしようかとしばらく考え、魔法の基本と思われる火の玉を出す事にした。

心の中で念じる……何も起こらない。

念じ方が足りないのかともっと強く念じる……。念じて、念じて、そして……

ゴォォォォォ！！

という音と共に直径２０センチほどの火の玉が飛び出した。

このまま目の前の木にぶつかる……と思ったら、５メートルぐらいであっさり消えてしまった。

しかし、火が出た。私の手から。私は興奮半分、恐怖半分で自分の手を見つめた。

他に何か出来ないか、と考えていたら、魔法で身長を伸ばすことを思いつき、試してみることにした。

伸びない。全く伸びない！必死に念じているのに、ＤＧによると１ミクロンも伸びてないと言っていた。がっかり。

その後も、雨を降らすだの（自分の周りに小雨が降った。）、力を

強化するだの（そこにあった岩を殴ったら、ヒビが入った。）、いろいろ試した後、私は本題に入ることにした。

「私はどこに行けばいいの？」

「城です。方向は西。距離は１６７０ゴナです。」

ゴナって何？距離の単位？１ゴナ何メートル？

しかしＤＧに聞いたがメートルを知らず、結局詳しい距離は不明。

私はどこまで行けばいいのかよくわからず歩きだした。

７時間後……。

どんなに歩いても景色が変わらず、疲れた私は腰を下ろし、地面に座った。

「後、どれぐらい？」

「１３５５ゴナです。」

げ、２割ぐらいしか歩いてない……。ぶっ続けで歩いても残り丸１日と４時間……。

もうヤダ。なんでこんな目に……。

私はあと１３５５ゴナ（多分約１２０キロ）というとんでもない距離を前にやる気が起こらず、ただぼーっとしていた。

空を飛べたらどれだけいいか……。

「あの～。」

「ん？何？」

その時、私は妙に目線が高いことに気付いた。

どういうこと？と思って下を見ると、私は地上５０センチぐらい浮いていた。

前に進もうとしたら簡単に進み、コントロール可能。

最初からこうすればよかった。

こうして快適に１メートルほど浮いて飛んでいたが、５分程で徐々に下がっていき、最後には落ちてしまった。

「何で？」

「魔力がきれたようで。」

また歩くのか……。

しばらくして、暗くなってきたので、私達はここで野宿することにした。

木になっていた果物（形と食感はリンゴ、色は茶色、味はバナナ。）を食べ、回復した魔力で葉っぱをかき集めてその上に寝ころんだ。

……みんな、どうしてるかな……。

まさかこんな事になるなんて……。今思えば、メリナに逆らわなければこんな事にならなかったんだよね……。

……ごめんなさい、メリナ。もし帰る事ができたら、ちゃんと謝ろう。

私はみんなの事を思いながら眠りについた。

第5章　拉致（後書き）

まだまだ続きます。

第6章　夜が明けて（前書き）

前の続きー。

第6章　夜が明けて

「あと１０００ゴナです。頑張ってください。」

私は起きた後あの果物を食べ、再び歩き出した。あと１０００ゴナ……半分も歩いてない。しかも話し相手が犬しかいないから、ヒマでヒマでたまったもんじゃない。

しかし、愚痴をこぼしてもしかたないため、その城を目指し、歩くのみ。

「ねぇ、ＤＧ、あなた改造動物でしょ？」

「まぁ、そんなもんですが。」

「それなら何か面白い事できないの？歩くだけじゃもう退屈で……。」

「じゃあ……こんなことしかできませんが……。」

と言ってＤＧが上を向く。何をするんだろう？

ビシュゥゥゥゥン！！

……なんか出た。目から赤いレーザー光線みたいなのが空の向こうに……。

「どうでした？」

「凄かった。アニマロイドってビーム兵器装備してんの？」

「いや、みんな違います。私の友人はロケットパンチを装備してるし、後輩は口から衝撃波を出すことができます。強い奴の中には核爆弾搭載してる奴さえいます。」

核爆弾搭載！？どういう事態に陥ったら使う気？それを聞いてみると、

「最終兵器として搭載してありますが、発射の指示が出た事はありません。しかも、大概搭載してる奴は暇潰しにブッ放して処分されます。」

「へぇー。」

などと話していると、

ガサッ

……嫌な予感が……。

ガサガサッ

音のした方を恐る恐る振り返る……。

顔がサーッと青ざめるのが自分でも分かった。なんと、1メートルぐらいありそうな蜘蛛がこちらに向かってきていた。

「嫌アアアアアアアア！！！！！」

私はものすごい悲鳴をあげて一目散に逃げ出した。方向なんて考えず、ただ逃げる事だけ考えていた。

１０分後……。

はー、はー、はー、（息切らしてる）

幸い犬を蹴っ飛ばしながら走ったため、はぐれる事は無かったのだが、蹴り飛ばしたことが別の問題を引き起こした。

「ねぇ、どこに行けばいいの？」

「うぅ……今の衝撃でレーダーが壊れました……。方向も距離も分かりません……。」

「えぇーーー！？」

蹴り飛ばしたのは私が悪いけど、ここまで、技術進歩したロボットが蹴りで壊れる！？はっきりいってＡＳＩ×Ｏ（×は伏字）より打たれ弱いんじゃ……。

……仕方ない、歩こう。

と、歩き出したのはよかったものの、こんな深い森を方角も分からず歩き回ると、ますます道に迷うもので……。

５時間後……。

お腹すいた……。ここがどこかもわからないし、何よりも水が無いのがつらい。ちょうど真上の木の上に果物があったため、私は木

に登り、果物を取って枝に座った。
そして果物（形はミカン、色は紫、大きさはサッカーボールぐらい。）を食べる……おいしい。
そんな感じでしばらくまったりしていると、下から声が聞こえてきた。
「おい、猫。あの果物を取ってこい。いや、取ってきてください。」
……誰？
「なんで俺が……。」
「うるせぇ！！無理やり連れてこられたんだから、これぐらいしてくれよ！！」
もしかして、私と同じ境遇の人？でもゴチャゴチャ喚いてうるさい。
「静かにしてよ。うっさいなぁ。」
と言い、私は飛び降りた。魔法が使えるから、無傷で着地。
で、後はご存知の通り。私達は3日間、城に向かってあるいていた。
「もう！頭撫でないで！私の方が年上なんだからっ！！」
カインに文句を言った。カインは中性的な顔つきで髪が長い、中々のイケメンだ。しかし……私より一歳年下なんだよね……。なのに私の背が低いから、小学生扱いされて……。

「すまん。お前が小学生に見えて……。」

「もーーっ！！私年上だもんっ！！」

こんな事が度々起こっている。年下に見られているせいか、お前呼ばわりだ。どうやったら、年上に見てもらえるのか……（背が小さいのが悪いって？しょうがないじゃん。）。

その夜……。

「このままいけば、明日で城だ。」

カインを案内していたアニマロイド、CTが言った。やっと……明日で……。森を旅するのは大変だった。食料も果物とネズミ（当然魔法で火を通す。）ぐらいで、水も少なく、風呂には入れないし、蜘蛛はでるし……。

でも、それも、明日でおわり……。嬉しい……。

「もう夜も遅いんで寝ましょうか。」

DGがそう言った。

私は明日ここから解放されるというのを楽しみにしながら、眠りについた。

第6章　夜が明けて（後書き）

メレンちゃんの回想はここまでです。次回、カイン視点で物語が進みます。

第7章　城へ（前書き）

カイン視点で物語が進みます。

第7章　城へ

……ふわぁ……よく寝た……。俺はメレンが集めた葉っぱのベッドから起き上がり、大きく伸びをした。……寝心地はかなり悪いが。

しかし、このベッドもこのまま行けば今日は世話にならずに済む。今日で城に着けるのだから。そう考えるだけで、なんか嬉しくなってきた。

俺のすぐ近くにメレンがぐっすり寝ている。寝起きが悪く、なかなか起きずにこの3日間イライラしたものだ。

「おい、メレン。朝だぞ。起きろ。」

肩を揺さぶりながら声をかけて起こそうとするが、どうしてなかなか起きないものか。その後も起こそうと奮闘するものの、全く起きない。俺はだんだん腹が立ってきた。

俺は心の中で念じ、葉っぱのベッドをはじけさせた。魔力がほとんど無いとあの猫がぬかしていたが、このくらいはできる。

「うわぁ！！な、何！？」

メレンがびっくりして飛び起きた。そんなメレンに俺は語りかけた。

「何じゃねぇよ。いつまで寝てる気だ。毎日毎日言わせんじゃねぇ。さっさと起きろ。」

「はーい。」

その後、二人であの果物（でかい紫ミカン）を食べ、猫と犬を起こした後、俺達は出発した。

7時間後……。

「この森を抜けるまであと30ゴナだ。」

猫が素っ気なく言った。あと少し……あと少しだ……。

ついに森を抜けたー！！

と思ったら高い高い崖っぷち。崖の下の方にでっかい城が見えた。

「この崖を降りたらもうすぐです。さぁ、降りましょう。」

“さぁ”って、おい。簡単に言うな。どうやって降りるんだ。まともに落ちたら即死じゃねぇか。アニマロイド（機械）と一緒にするな。

「どうやって降りるんだ？」

俺は猫に尋ねた。

「男だろ。崖の割れ目にでも手足かけて降りろ。甘ったれるな。アニマロイドはこの程度ではどうもないがな。」

「あれ？でもDGは私が蹴り飛ばしただけでレーダーが壊れてたよ？崖から落ちるって蹴り飛ばされるよりメチャクチャ衝撃大きいと思うけど。」

と聞いて顔を見合わせる二匹。……どういう事？

「ＤＧは欠陥品で……。」

「あー！私は欠陥品じゃありません！！それにＣＴだってこないだメイドにふまれてロケットパンチ修理しなければならなかったじゃないですか！！」

「言うな、バカ！！」

……なんだかんだで。

俺とメレンはロープで腰と太い木を結び、慎重に崖を降りることにした。犬と猫は俺らの肩に乗ることにした。

３０分後……。

いつブッちぎれるかわからないロープでようやく下まで降りた俺はメレンに盛大に文句を言われた。メレンは俺より早く下まで着いたので、俺を待っていたのだ。

「もー。何でこんなに遅いのよ！！」

「やかましい！！寝起きが絶望的に悪くてずっと俺をイライラさせとる奴が言うな！！」

それから歩いて2時間後……

やっと着いた。ここがこの王国の城……。

やっぱりでかい。俺の家なんて比べ物にならん。シンデレラに出てきた城と同じぐらいだと思う。外観も似ているし。

城下町の門まで行くと、二人の門番らしきおじさんがこちらに槍を向けた。物騒だなぁ。

「貴様ら、何者だ！何の用で来た！名乗れ！！」

オッサンの一人がいった。俺は言われた通りに名乗った。

「俺はカイン。こっちはメレン。何の用だと聞かれても俺らはそっちから呼ばれたんだ。言う必要はねぇだろ。」

するともう一人のオッサンが猫に話しかけた。

「おい……本当にこいつらか！？二人ともガキ……特に一人は小学生じゃねぇか！こんなや…ぐふぅ！！」

オッサンは最後まで言う事が出来なかった。なぜならメレンが思いっきりハイキックを喰らわしたからで……。

「誰が小学生だって！？ふざけんじゃないわよこのオッサン！！私は１７歳よ！１７！！」

すると蹴られてないオッサンが弁解した。

「申し訳ございません！！相方がこの様な侮辱を……どうかお許し下さい！！」

「じゃあさっさと通して！！そしてもう二度と小学生なんて言わないで！！」

メレンが怒鳴り散らした。メレンは身長が低くてよくからかわれたと言っていた。俺の時は少し怒るぐらいだったが本当は凄く気にしているんだろう。

「さ、行こ行こ。」

猫が言ったので、俺も門をくぐった。

ものすごく綺麗な町並みだ。建物はどれも白く、美しい造りだ。そして一番奥に見える大きな城……。

俺達はその城に向かってあるいていった。

第7章　城へ（後書き）

続きは明日（多分）。

第8章　町で（前書き）

前の続きです。物語自体はあまり進みません。

第8章　町で

俺は綺麗な町並みを眺めながら、城へ続く道をゆっくりと歩いていった。とても賑やかな町でたくさんの人が買い物や噂話をしている。ここの町の店はスーパーやファーストフードショップなどはなく、ほとんど市場のような店だ。

しかし、ここの世界の野菜や果物はどうしてこうも奇妙な物ばかりなのだろうか。

あのでかい紫ミカンや茶色のリンゴ、真っ黒な桃、鮮やかなピンク色のキュウリ、なんか紅いヘッドドレス（メイドが頭に着けてるやつ）みたいなもの……。

普通の野菜、果物は無いのか。あ、この世界ではこれが普通なのか……。

しかしその紅色のヘッドドレスの名前が“ブラッドメイド”。なんでそんな名前に……。

しかしメレンが興味を惹かれたようで、ブラッドメイドを一つ買った。どうやら紅い部分は皮でそれを剥いて食べるらしい。皮を剥くと真っ白な中身が。結構美味しそう。

しかし、メレンが一口食べたら表情が一変。……どんな味？

「……辛っ！！何コレ！？」

「え？そんなに辛いのか？」

「じゃあ食べてみて……辛ーい！！」

どこまで辛いのか？俺も一口食べる……。

「あ～～！！辛っ！！」

辛い！！小さい頃に唐辛子を間違えて丸ごと食って大変な目にあったが、ひと欠片……しかも相当小さい欠片なのにそれより辛い！！！

しかし売り子のお姉さんによると皮はこれの数十倍辛いらしい……。

メレンは口直しの為か、あの桃色キュウリを買ってかじっていた。普通に食ってるから不味くはないのか……。

「……苦っ！！何でここの野菜ってこんなに不味いの……？」

どうやら口直しにもならなかったようだ。ここの世界の人々はこんなのを食ってるのか……。

俺らは散々な気分で歩き出した。しかし犬猫は平気でブラッドメイドとキラーピンク（桃色キュウリ）を食っていた為、常用食かもしれない。

城に続く道を歩いていると路地裏から、いかにも不良って感じの兄ちゃんが三人、こっちに話しかけてきた。

「おう、お嬢ちゃん！可愛いじゃねぇか！そんな奴とじゃなくて俺達と遊ぼうぜ！」

どうやらメレンにナンパしてるようだ……ロリコンか！！

メレンがロリコン野郎に言い返した。

「あんたらみたいなチャラチャラした人達大ッ嫌い！！目障りだからどっか行って！」

おー。ボロクソ言っとる。

「てめぇ！！生意気いいやがって！！お前ら！！やっちまえ！！」

部下と思われるハゲのグラサンと入れ墨のでかい兄ちゃんが襲いかかってきた。

俺はでかい兄ちゃんに蹴られ、地面に叩き付けられた。よし、正当防衛だ。ボッコボコにしても罪に問われまい。

俺は魔力で腕に力を込めて、死なない程度にぶん殴った。

でかい兄ちゃんはその一撃で気絶し地面に伸びてしまった。一昨日きやがれ。

メレンの方もハゲを魔力を使って殴るわ蹴るわの暴行を加え、気絶させていた。

「くそ！！調子に乗りやがって！！」

金髪のチャラチャラしたのがナイフを持って襲いかかった。部下と武器に頼るか。この兄ちゃんは。

俺はナイフを避けて、兄ちゃんを殴りつけた。しかし気絶しなかった。打たれ強いなぁ。

今度はメレンに襲いかかって、ナイフは殴られた際に落とした為、つかみかかった。

その時、急に不良が宙に浮いたと思ったら、地面に叩きつけられ、気絶してしまった。

「メレン、今の技は……。」

「あら、柔道を知らないの？」

「ジュードー？東洋の格闘技か。」

聞いた事はあったが、こんな技だったのか……。

「さ、こいつらは放っておいて、さっさと行こ。」

俺達は気絶した不良には目もくれず歩き出した。

で、城の近くに来た。やっぱりでけー。と見とれていると門番と思われるオッサン２人がこちらに話しかけた。

「こちらは王の住む城だ。君達のような子供が何の用で来た？」

すると猫が門番に説明した。

「俺とＤＧが連れて来た。こいつらがこの世界を救ってくれる（ハズ）。」

「おぉ！そうでしたか！！これは失礼しました！王がお待ちです！！ささ！どうぞ中へ！！」

と言われ、俺達は城の中に招待され、しばらく歩いたあと、更衣室らしいところに案内された。そして俺はいかにも西洋騎士って感じの服装に着替えさせられた。まぁ、ボロボロの私服で面会する訳にもいかないからな。

メレンも女性騎士のような服装に着替えていた。しかし服が少し緩そうだった。

「さ、こちらへ！！」

俺達は門番に案内され、王の間へと案内された。

第9章　城で

俺達2人は王の間に通された。とても広く、壁のあちこちに装飾品が飾られていて、とても高い天井には、豪華なシャンデリアがいくつも吊されていた。

そして、奥の王座に身長2メートルぐらいで口髭の立派なおじさんが座っていた。あの人が王様か。

猫が王様に報告した。

「王、こちらの二人は我々を見る事ができました。あちら側の世界で我々を見る事ができるのは、相当の魔力を持っている証。この2人がきっとこの世界に迫る危機を救ってくれるハズです！！」

「そうか。分かった。CT、DG、下がってよいぞ。」

犬猫が下がっていった。その後、王様が俺達に話し掛けた。

「君らがこの世界に招待されたものか。私は国王のグメハルだ。以後よろしく頼む。

「カイン？セプルです。お会いできた事を光栄に思います。」

俺はとっさに思いついた挨拶をした。取ってつけたような挨拶だが、これで大丈夫だろう。

「メレン？マチルです。お会いできて光栄ですわ。」

「さて、君らも知っているだろうが、この世界は今、非常に大変な事態に陥っている。この世界には、魔法が存在するのだが、魔力が高いのをいいことに、魔法を悪用して、世界を制服するのを企む奴らがおってな、ここの世界の者では太刀打ちできんのだ。そこで、そちらの世界から魔法の素質がある者を集めておるのだ。」

「王様、ちょっといいですか？」

「何だ？」

メレンが王様に質問した。

「ここの世界の人で悪い人たちにかなわないのなら、私達にも勝てないんじゃないんですか？」

あ、それ思う。魔法の素質があるだけでは、ここの世界の人と何ら変わらない。ここの世界の人がかなわんのなら、特に変わらない俺達が勝てる訳がない。

「そちらの世界で魔法の素質がある者はこちらの世界の者とは比べ物にならない程の力を持っている。その為、そちらの世界で魔法の素質がある者を探しておったのだ。」

王様が説明してくれた。なるほど、これなら納得する。……しかし、それが本当なら、俺達はそこら辺の人と比べ物にならん程強いのか？

「さて、この世界の危機を救ってくれるな？」

王様が尋ねた。ここで断れば国家反逆罪で極刑だろう。メレンの方

をちらっと見ると同じ事を考えているようだ。
答えはもちろん……

「分かりました。全力を尽くします。」

二人揃って同じ答えを言った。

「おぉ！やってくれるか！！それはありがたい！！」

……という訳で。

俺達は特別に城をこの世界にいる間の家として利用できるようになり（あまり使うことは無いと思うけど。）城の三階を居住スペースとして貸してもらった。

俺は自分の部屋に入った。あまり広くはないが、綺麗な部屋だ。ベッドも設置されている。

そういえば長いこと風呂に入って無い。案内してくれたメイドによると風呂場が奥にあると言うので、俺は風呂場に向かうことにした。

……風呂場にはもちろん男湯と女湯があるのだが、書いてある文字が俺には理解不能。ギリシア文字を反転させて色々書き加えたような字だ。俺達の世界の人間に解読できる奴などおるまい。

片方の扉に張り紙があり、何か書いてある……英語だがずいぶんヘタクソな字だ。

えーっと、“覗いたら殺す　メレン”……こっちが女湯か。覗いたらロリコン扱いの上に殺されるから、間違えないようにしよう。

服を脱ぎ、湯船に浸かる……。あーっ、気持ちいい……。思えば６日歩いてばかりでずいぶん疲れているから、とても快適だ。

風呂から上がった後、棚にあった服に着替える……あまり似合ってない気がする。まぁあの騎士風の服はどうも趣味が悪い。こっちのほうがいい。

部屋に戻ると食事が用意されていた。が、この世界の食べ物は本当に変わっている。

なんか俺の握り拳ぐらいの蚊のような羽虫が、原型を留めたまま唐揚げにされている。味噌汁と思われる汁には、橙色の蝶の羽が浮いている。

これ、常用食か？俺達の世界ではありえない料理だ。しかし用意されたんだからきっと常用食……。

……。

……しょうがない。俺は恐る恐る唐揚げを口にいれる……あ、美味い。エビみたいな味がする。蝶の羽の味噌汁もなかなか美味い。

……しかし、なぜデザートがブラッドメイド（殺人果実）なのだろう。俺はこれには手を付けなかった。

俺はベッドに潜り込んだ……あー、柔らかい。俺はすぐに瞼が重くなり、夢も見ない程ぐっすり眠った……。

第9章　城で（後書き）

ＤＳｉではこれ以上入力しようとすると、入力できなくなってしまう（多分容量の関係で）ので毎回短いんです。許してください。

べ、別にめんどくさいとか話のネタが無いとかそういうのじゃないんだからっ！！

第１０章　旅の準備

……朝か……。

俺が起きた時にはすでに日が高く登っており、テーブルの上には朝食が置いてあった。……いつ置かれたんだろう。

あぁ……やっぱり朝食もゲテモノ揃いだ。真っ黒な葉っぱと青いキノコのサラダ、バッタのような虫のソテー、目玉焼きは、白身と黄身の色が反対だ。

俺は何も食べずに廊下にでた。するとＣＴが歩いてきて、

「お、カイン。ちょうどいい。大変な事になってんだ。ちょっときてくれ。」

何だ？俺はＣＴに案内され、二階にあるメイドの休憩室に来た。中が騒がしい。何が起こっている？

中を覗くと大量のメイドが誰かを取り囲んで何か色々やっていた。しばらく見ていると、取り囲まれているのがメレンだと分かった。

「いや、城中のメイドがメレンに骨抜きにされて……。」

なるほど、しかし、それを俺にどうしろと言うんだ？メイドが二十六人、一人のロリなＪＫを取り囲んで色々やっとるこの事態を。

メイド達がメレンから少し離れ、キャーキャー言ってる。中にはカメラで何か撮っているのもいる。

俺にもちらっと見えた……ヤバい、めっちゃ可愛い。メレンは猫耳メイドの衣装に身を包んでいた。頬の赤らめ、ちょっと涙ぐんでいる……直視できん。

メレンが助けを求めるかのようにこっちを見る……可愛すぎる。無理だ、俺にはどうにもできない……。

俺は逃げるようにその場を離れ、旅の準備に取り掛かった。

まずは武器。武器庫に行くと、剣、槍、弓等、たくさんの武器があった。どれにしょうか……。

色々試し、一番しっくりきた1メートル程のロングソードにすることにした。いかにも勇者が使ってそうな剣だ。

次に防具庫に行き、防具をさがす。見た目が結構かっこいいレザーマントと材質はよくわからないが丈夫な盾を選んだ。

その後部屋に戻る途中でようやく解放されたメレンとすれ違った。未だに猫耳メイドのままだ。

「ねぇ、カイン……。」

「ん、何だ？」

「この格好（猫耳メイド）……変じゃ無い？」

なんかまだ泣きそうな顔をしている……。ここで言葉の選択を誤ったら、確実に泣き出すだろう。

「いや……変じゃ無いと思うよ？その……可愛いし。」

俺はメレンを傷つけないようにした。こう言えば大丈夫だろう。

俺はメレンを武器庫と防具庫に連れていき、武器と防具を選ばせた。

小柄なメレンにはここに置いてある剣や槍は大き過ぎて扱えず没になり、弓を使わせたら何故か矢ではなく弓の方が飛んでいってしまい、これも没。

しばらくしてメレンがボウガンを見つけ、これがしっくりくると言い、武器決定。その後、調子に乗って射出させすぎた為、俺はメレンを叱りつけた。

防具に関しては武器よりも厄介だった。防具は小学生（メレンは高校生だが）が使う事を想定しておらず、小さなサイズが殆ど無い。

数少ないサイズが合う物の中で、メレンが気に入ったのは、皮で出来た丈夫そうな服（防水加工もばっちりしてあった。）。本人は動きやすい方がいいと言ったのでこれで決定。

これで準備は整った。しかし、世界を救うと言っても、どこに行けばいいんだろう？猫に聞いてみると、

「悪い奴らのせいで魔物が活発化して、迷惑してる所がたくさんある。まずはそこに行ってみろ。場所は酒場のマスターが詳しく知っている。」

との事。しかし、今は昼間。酒場か開いているハズがない。

俺達はやっぱりゲテモノばかりの昼食を食べ、メレンはメイド達に再び引っ張りだこにされた。またメイド姿にさせられてる……。

こっちに助けを求めてきたが、あまりの可愛さにまともに直視できない。

……すまん、メレン。まともにお前の方を見たら俺まで骨抜きにされそうだ。

なんて事をしてたからだろうか。あっという間に空が暗くなり、夜になった。俺達二人は情報収集の為、酒場へと向かった。

第１０章　旅の準備（後書き）

これを書いた後、自分で読み返し、なぜ俺はメレンをメイドにしたんだろうと自分でも思いました。……ネタの為かなぁ。

次回はメレン視点でストーリーが進みます。

第１１章　酒場へ（前書き）

コンカイハメレンシテンダヨ。ハンカクカタカナデカイテルイミハトクニナイヨ。ディーエスアイカラジャモジノニュウリョクシズライシ、ヨウリョウミジカイカラタイヘンダヨ。ヤッパリコンカイモミジカインダ。ゴメンナサイ。

第１１章　酒場へ

私はせっかく着た皮の服をメイド達に剥がされてしまい、メリナ（そっちの世界にいる私の専属メイド）が着ていたようなメイド服を着せられてしまった。恥ずかしい……。

メイド達は私をメイド姿にするとキャーキャー言いながら離れて、携帯で写真を取り始めた。

そしてひとしきり騒いだ後、私を違う格好にするべく、大人数で私を取り囲んだ。数人がかりで私の来ている服を剥がそうとする。

私はカイン（ちょうど通りかかってた）にメイド達をどうにかしてほしいと助けを求めた。しかしカインは暫くはこちらを見物人していたが、急に逃げ出してしまった。

その時カインが

「俺は……俺は……！！」

と言っているのが聞こえた。何があったんだろう？

と、その時、私に抱きついていたメイドの一人が言った。

「ふふふ……あなたを助けられる方（カイン）は逃げてしまいましたわ…。もう逃げられませんわよ……。さ、おとなしくしててください……。」

私はなんとかして逃げようとしたが、何しろ相手は２６人。あっと

いう間に逃走失敗。

私は小学校５年生ぐらいから背が全く伸びなくなったのだか、どういう訳かその後胸ばかりが成長して現在に至る。胸より身長を成長させたかった。

こんなアンバランスな体型の為（背が小さいので胸が大きいと言われた事は無かったが。）、着る物も胸がつっかえて、随分苦労したものだ。

しかもきついだけならまだいいが、ここで着せられる服はメイド服だのスクール水着だの、モコモコの着ぐるみだの恥ずかしい物ばっかり。

「ほ～ら。次もこんなに可愛い服ですわ。そんなに嫌がらずに……さぁさぁ。」

……こんな（バカな）事をしてたからだろうか。辺りは瞬く間に暗くなり、酒場の開いている時間になった。……メイド服で行く訳にはいかない。

私は訳を言ってメイド達からやっと解放してもらい、皮の服に着替えて、カインと合流し、一緒に酒場へ向かった。何故助けずに逃げたのかと盛大に文句を言いながら。

歩き続けて２０分……。

「ここが酒場？」

私は思わず呟いた。地図を見るとここで間違いなさそうだし、ドア

の隣に意味不明の文字（この世界の文字はとてもややこしい。）とビールの絵が描いてある看板があるから間違いないだろう。

しかし、外観が他の民家と同じ。自分の家を酒場にしたのだろうか（お金が無かったのかなぁ？）。

中に入ってみると、やっぱり民家。玄関もあるし、一階部分を酒場にしたとしか思えない。奥にいるヒゲの立派な人（赤い帽子じゃないよ。）がマスターか。

「おやおや、君達。ここは君達のような子供の来る所じゃないよ。親御さんが心配しているだろうから、早く帰りなさい。」

ここで１０年過ごしてもあっちでは5分しか経ってないみたいだから、親は心配してない（メリナは心配してるかな？あ、眠ってるのか。）。

カインがマスターにこれまでの事を簡単に説明した。説明が終わるとマスターは感心したように言った。

「ほぅ。それならあなた達がこの世界を救うべくこの世界に招かれ、戦うのですね？」

実際は招かれたんじゃなくて、何も知らされないまま拉致されて来たんだけど……間違ってないか。

「それで、魔物によって被害が出ている所はどこかありませんか？」

カインがマスターに聞いた。

「そうですねぇ……森の中の集落……あの崖の上の森です。そこに最近魔物が出てきて被害に遭っているというのを聞いたことがあります。」

あのころ森に集落が……知らなかった。まずはそこに行く事になりそう……。

「そうですか。ありがとうございます。」

私達はお礼を言い、カインはコーヒーを、私は紅茶を飲みながらのーんびりしていると……。

ドアが開いてハゲの目立つオッサンが入ってきた。そのハゲオヤジは私達の方をちらっと見るとカウンターの奥に進んだ。

私はハゲオヤジが後ろを通りかかった時、ハゲオヤジが伸ばした腕を掴んだ。魔法のおかげで痴漢しようとするのも簡単にわかる。ハゲがびっくりして言った。

「な、なんで分かったんだ!?」

「いや……（魔法のおかげで）丸見えだったし。」

私がいうとカインが嘲笑うかのようにハゲに言った。

「テメェもロリコンか？オッサン。」

「くそー!!覚えてろよー!!」

そう言って八ゲオヤジは出て行った。ざまーみやがれ。

私達はマスターにお金を払い、帰り道を歩いて城に帰った。

城に帰ると、メイドが数人出迎えてくれた。全員にこやかに笑っていた……嫌な予感……。

第１１章　酒場へ（後書き）

酒場でのやり取り殆どできなかった……最初のメイド云々で尺取り過ぎたかなぁ……。何度も言った通り、ＤＳｉの容量ではこれくらいが限度。あれ以上だと入力を受け付けなくなるんです。

次回もメレン視点です。続きです。やっぱり短いです。なのであまり期待せずに待っててください。

……だから、短いのは容量の問題であってめんどくさいとかじゃないんだからっ！！

第１２章　旅立ち（前書き）

やっと旅の始まりだよ～。メレン視点だよ～。

第12章　旅立ち

「はい、メレン様……あーん……何でそんなに嫌がるんですか？……ほらほら……」

私は城に帰った後メイドに引き渡されて、メイドに晩御飯を食べさせてもらっているのだが……私はものすごく嫌がった。……恥ずかしいんじゃなくて、食事の内容が嫌だった。

お粥のような物には米ではなく、オタマジャクシのような生き物が使われており、マグロの目玉のでっかいのがステーキにされており、サラダの葉っぱの模様がリアルな人間の顔で……。

そんでもってトドメだと言わんばかりにデザートがブラッドメイド。これをデザートにしようとする神経がよくわからない。

で、私はメイドの膝に座らされ、この奇妙な食事をしているのだか……とんでもなく不味い。

結局私はブラッドメイドまで綺麗に食べさせられた。……口の中が痛い（辛さのせいで）……うぇっ、吐き気が……。

まさに地獄の晩御飯。ここまで酷い食事している人、なかなかいないだろう。……うぷっ。

私はトイレで胃の中の物を体外に出して、自分の部屋のベッドに倒れ込んだ。どうして私だけこんな目に……（カインは男だからあんな事する訳にはいかないけど）。

明日からは、旅に出るから、メイド達に振り回されるのも、これで最後……。あぁ、良かった。明日からは……もう……。

私はいつの間にか眠ってしまった。

次の日……。

「おーい、メレン。朝だぞ、起きろー。」

うーん……あと……5分だけ……寝かせて……。

「おい！起きろ！！メレン！！聞こえてんのか！！」

「はーい……今…起きたよ……ちょっと……待って…。」

私は寝癖を整え、軽く顔を洗い、目が覚めた所で外に出た。

「おはよー。カイン。」

「あぁ、おはよう。」

その後、王様に旅立ちをつたえた後、お金の入った袋、旅に必要な物が入った袋をもらい、更に私は別れを惜しむメイド達全員に抱きしめられ、私達は外にでた。

目指すは、崖の上のあの森。私達は街門をくぐり抜けて外にでた。

さぁ、冒険の始まりだ。

「で、どうやって崖を登る？」

私はカインに尋ねた。旅を始めた初っ端から崖の上に行くにはどうすればいいか、という問題ができた。……幸先悪ッ。

……いい事思いついた。私は心の中で念じて、上昇気流（たつまき）をつくりだした。

竜巻が私達を巻き上げ、どんどん上に運んでいく……はい、上に着いた。魔法って、本当に便利。

「さ、行こ行こ。」

私達は森の奥へと進んでいった。途中何回か進路方向を変えてどんどん進んでいく。

5時間後……。

はぁ……はぁ……はぁ……（息切らしてる）。

あれから全く何も起こらない。凶暴な魔物が出ることも、集落が見つかることもない。まぁ、この森はとても広いから、簡単に見つかることは無いと思ったけど。

更に5時間後……。

いくら広いといってもここまで何も起こらないなんて……。もうヤダ。疲れた。カインも流石に疲れたらしく、ここで一旦休憩。

……ここで私はある事を思いついた。心の中で念じてこの辺に人がいるかを（もちろんカインを除く）調べた。

北東１７９０ゴナ（何故か単位がメートルではなくゴナで頭の中に距離が入ってきた。）に人の反応、それ以外の反応は人じゃない生き物ね。

「カイン、北東１７９０ゴナに人の反応。行こう、北東へ。」

「……メレン、ちょっといいか？」

「ん？なぁに？」

「何故最初からそれを使わん。あっちこっち歩き回ったのが無駄じゃねえか。」

「……ごめん。」

再び歩いて３時間後……。

辺りがすっかり暗くなった。今日はここで野宿。私は魔法で葉っぱをかき集めて、簡単な寝床をつくり、木の上に登り、果物をとった。真っ黒な桃。市場にも売ってた物だ。

カインと顔を見合わせる……これ、美味しいの？恐る恐る口にする……市場で売ってたから毒は無いだろう……。

「……不味ッ……。」

なんだろう、炭みたいな味がする。……なんでこの世界ではこんなに不味いものばかり売ってるんだろう。それともこっちの世界の人間の口に合わないだけ？

とにかく酷い食事を終え、私達は横になった。

……なんか嫌な気配がする。私は立ち上がり辺りを見渡した。

「カイン、お」

「グルルルル！！」

後ろを振り返ると、体長2メートル程の黒ヒョウが、こちらを狙っていた。

第１２章　旅立ち（後書き）

メレンのセリフに“お”で終わった奴あったけど、あれは起きてって言いかけたんですよ。誤植じゃないですよ。

第１３章　決闘（前書き）

メレン視点。前の続き。

第１３章　決闘

どうやら戦うしかなさそうだ。相手が人間ならまだ話し合う余地がある。しかしコイツは肉食獣。話し合える相手ではない。念のためになだめようとしたが、無論失敗。

黒豹が飛びかかってきた。単調な攻撃なので二人ともアッサリ回避。カインがカウンターで斬りかかった。あ、もう終わり？

しかし斬ったのに大量出血でのたうち回るどころか、カスリ傷すらついていない。この獣、カインをロングソードでは傷すら付かないほど頑丈のようだ。

私は心の中で念じて、空気中の水蒸気を凍らせ、氷の粒を飛ばした。人間だったら、傷だらけになる。

しかしこの獣は氷の粒が当たったのに、全然聞いてない。氷が小さいのか？しかし、粒を大きくしても全く効いていなかった。

私は頭にきて、火の玉を放った。３０センチ程の火の玉をぶつける。だが、これも通用しない。どうすりゃいいんだか。

カインが再び斬りかかる。あぁ、やっぱり効かない。黒豹が爪を振りかざすとカインのロングソードが欠けてしまった。

あぁ、もうどうすればいいの！？私はもはやヤケクソで黒豹の足を思いっきり蹴り飛ばした。

するとバランスを崩してアッサリこけた。あんなに頑丈なのに、蹴

り一発ですっ転ぶって……。

でも、今がチャンス！！私は魔法で力を高め、力任せに殴る蹴るを繰り返した。しかし、これも効いているように見えない。あー！もう！どうすれば倒せるのよっ！！

黒豹が私に飛びかかった。近くに居た為、私は上手くよけられず、肩を切り裂かれた。傷口から血が流れ出す。

「ッッ！！」

私は痛みをこらえ、豹を蹴って離れた後、肩に魔力を集中させた。傷が塞がり、血が止まった。まだ随分痛いが、我慢できない程ではない。

見ると、カインと豹が戦っている。カインも剣を振り回してなんとか戦っているが、アイツには、何のダメージも与えてない。

黒豹がカインの脇腹を引っ掻いた。カインが悲鳴をあげる。黒豹が再び爪を振り下ろす。

私はキレた。私は怒りそのままに獣の腹を蹴飛ばし、カインから引き離した後、魔力を集中させた。

私の魔法で獣がいる所に雷を落とした。ものすごい轟音がして、一瞬視界が真っ白になる。雷が収まったら、あの獣は信じられない程頑丈な事に、少ししびれただけだった。しかしこれで怒りが収まる程私は単純ではない。

次は地面を殴りつけた。もちろん魔力を込めて。すると地面が割れ、

あの獣を飲み込ん……ではないが、アイツは少し体が埋まって動きが止まった。

私はトドメに手からエネルギー弾を放った。皮膚に攻撃しても効かないので、弾を口の中に放って内部から爆発させる。

ドォッガーーーーーーーーン！！！！

ものすごい勢いで大爆発が起きた。自分でも想像以上の爆発だ。おかげで森の一部を焼け野原にしてしまった。

もちろんこんな規模の大爆発、あの黒豹でもとても耐えられなかった。アイツが居た所は真っ黒焦げで、それ以外は何も残っていなかった。

私とカインは魔法でバリアを張っていた為、ケガをしなかったが、カインがひっかかれた時の傷はどうだろう。

「カイン、大丈夫？」

「あぁ、大丈夫だ。」

私はカインの傷口を魔法で治療した。血が流れていたが、治療した事により良くなった。

「んにしても……」

カインが呟く。

「随分ハデにブッ放したもんだなぁ。」

「いやぁ、自分でもこうなるとはおもわなくって……」

「メレン、お前、その傷大丈夫か？」

「うん、だい……じょ……」

私は急にめまいに似た症状に襲われ、カインの方に倒れ込んだ。

「おい！大丈夫か！？」

「ごめん、急にふらって……。」

多分魔力の使い過ぎで体に負担が掛かったのだろう。とても眠くなってきた。眠ったら駄目だ……。

……ん……、ここは……。

辺りはすっかり暗くなっていた。どうやらあのまま眠ってしまったようだ。なんか、まだ疲れがとれていない感じがする。森の一部を吹っ飛ばすのは、魔法を持ってしても疲れるようだ。まだ眠い……。

「気がついたか？」

「うん、もう大丈夫。」

私はカインに安否をつたえた。それにしても眠い。このまま3日ぐらい眠れそうだ。

「ねぇ、カイン。なんか聞こえない？足音みたいなのが。」

「ん？……確かに。それも大勢で。」

しばらくすると明かりが見えた。３つ、４つ……何か沢山ある。

「ねぇ、取り囲まれてない？」

すると、こちらに１人の男の人が近寄ってきた。

第13章　決闘（後書き）

次回は……カイン視点だよ。

第１４章　集落（前書き）

今回は……カイン視点だよ……。

第１４章　集落

俺とメレンは今、集落の族長の家にいる。

「では……おぬし達が、伝説の……。」

「はい、そうだと思います。」

どうやらここの集落では、俺達は伝説らしい。……まだ高校生にしか見えない男子と俺の隣でウトウトしてるちっちゃい女子がそう見えるのか？特にメレンはお偉いさんの前で寝る寸前とメチャメチャ無礼なのだか。

５時間前……。

俺達の前に一人の男が近寄ってきた。

「いきなり申し訳ない。私はこの森の集落から来たセネラと言う者だ。君達にいくつか聞きたい事がある。」

「はい。別にいいですけど。」

「単刀直入に言う。ここから東に８０ゴナ離れた所で落雷、地割れ、大爆発が観測された。又、同時に強い魔力を感じた。君達は何か知らないか？」

「それなら……」

俺は隣で睡魔に負けそうになってるメレンを差した。

「コイツがやりましたけど。」
と、同時に周りにいる兵士のような人達が、ざわざわと騒ぎ始めた。
そんなにざわめく事か？
「まさか……君！！それは本当か！！？」
「はい。」
「そんな……こんな少女が！！信じられない！！こんな子供があんな事をやったのか！！？」
ものすごい取り乱している。高校生がここまでハデにやるって、そこまで驚く事なのか？
「君達……何者なんだ？」
「アメリカに住んでいたけどひょんな事から拉致されてきた高校生です。」
「あめ……？どこだそこは？君達は外国から来たのか？」
あ、そうか。ここは異世界だからアメリカとか言っても通じる訳無いか。でも、何て言おうか？……。
「異世界から来ました。アメリカとは、その世界の国の名前です。」
そう言うと、セネラさんは顔面蒼白になった。……異世界って言うのがマズかった？

「……これは……もしかしたら……伝説の……。」

伝説？え？なんで？もしかしてこの世界の危機を救う異世界の勇者がいずれ現れるとか、予言みたいなのがあんの？

「君達！これから君達には、族長様と面会してもらう！いいな！」

「……ん？カイン……何かあったの？」

メレンが寝ぼけながら言った。こいつは一旦無視。俺は……逆らったら反逆罪でやっぱり極刑だろうなぁ……。

「わかりました。」

何か前もこんな事あったなぁ……。ここの世界の人達、反逆罪による極刑というのを分かっていてこういうの言っているのかなぁ……？

「よし！！では、これから君達を集落に案内する！」

と、言うが早いか、俺はセネラさんに体をつかまれた。……へ？

「あの」

「心配するな。ちょっと荒いやり方だが、怪我はしない。大切なのは怖がらない事だ。いいな？」

「いやだから何を」

「いくぞぉぉぉーーーーーー！！！」

そして俺はセネラさんに思いっきり投げ飛ばされた。

「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

その投げ飛ばすのがまたすごい事。俺は今、空を飛んでいる。そう。俺は集落に向かって投げ飛ばされたのだ。

まさか投げ飛ばすのが移動方法とは……流石、異世界はやる事が違うなー。

……感心している場合ではない。大丈夫か！？落下場所が悪かったら即死なんだが。ええい、もうどうしようもない。ただ、上手くいく事を信じよう。

「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

後ろからものすごい悲鳴が聞こえる。多分メレンだろう。

空を飛び続け2時間。だんだん高度が落ちていく。そして……。

ぼふっ！！

なんかマットみたいな物の上に落下した。大丈夫じゃ無い。いくらマットがあっても全く痛みが無いというのはありえない。メチャクチャ痛い。あの野郎、心配ないとか言いやがって……。嘘つきだ。

「げふぁっっ！！？」

……（悶絶中）。

ゲホッ、ゲホッ、あの野郎、俺と全く同じ場所にメレンを落とすんじゃねぇ……。

いくらメレンが軽い（小さい）とはいえ、反射で魔力使って体強化してなかったら良くても内臓破裂、悪けりゃあ死んでたぞ。

痛ぇ……あの野郎、次会ったらぶっ飛ばしてやる。

「おい、メレン、大丈夫か？」

「……ん、大丈夫……でも……。」

「でも？」

「眠い……。」

ハァ……。まぁ、魔力の使いすぎでこうなっているだけだろう。明日までゆっくり休ませてやろう。

「おー、君達、ちゃんとここに落ちてきたか。」

……この声……セネラさんだ。俺は振り返りニッコリ笑った……。

第１４章　集落（後書き）

もうＤＳｉの容量がないからここで終わり。続きはまた今度。

第15章　集落（続き）

「おーい！！君！！酷いじゃないか！お願いだから降ろしてくれー！」

「今までの事全て謝ってくれたらいつでも降ろしてあげますよ。」

俺は今までされた事の仕返しに魔力で力を込めたアッパーでセネラさんを木の上までぶっ飛ばした。木の枝に引っ掛けてやった。ざまーみろ。

「ちょっと君！！君はいったいなぜ怒っているんだ！？私に覚えは無いぞ！！」

「よし。じゃあ一生そこにいろ。ほら、メレン、おぶってやるから。」

俺はメレンを抱いて行こうとした。

「わー！！待て！！謝る！！君達に何も言わずに投げ飛ばしたり、君の落下地点に小学生を落としたりしたのも謝る！！すいませんでした！！下ろしてください！！」

うん、下ろしてやらない。いや、下ろしてあげたいのは山々なんだけどね？問題は……。

「誰が小学生だって？」

……コイツである。

結局、メレンが木を魔法でぶっ飛ばしたことで、セネルさんは地上に降りてきた。残念……じゃなくて、良かったね。

メレンは再び眠ってしまった。セネラさんに族長に失礼だから起こせ、と言われたんだか……。

可愛いな、畜生！！！

あまりの可愛さに直視できず、失敗。俺は……ロリコンじゃない……。その証拠に、メレンは俺より年上だ！！（苦し紛れに）

集落は、俺が想像してたのより、ずっと賑やかな場所だった。子供は見えないが大人達は楽しそうに喋っている。家は木材の一軒家で、奥の方に、でかい家が見える。あれが族長の家だろう。

そして２０分後……

族長様の家に着いた。セネラさんに案内され、中に入る……。

「失礼しうわっ！！」

何この人達！！？奥に座っている男の人は昔プロレスで活躍した東洋の巨人にそっくりだし、その隣の女性は身長１８０センチぐらいで男のボディービルダーよろしく筋肉隆々だ。更に部屋にいる２人のお兄さんは身長３メートルぐらいある。

何この怪物一家！！メッチャ怖い！！奥の女の人が一言。

「あぁ？」

何ヤダ怖い！！しかしセネラさんが見た目によらず温厚な人達だからと耳打ちし、俺は話しかける。

「あ、あああ、あの、せ、せせ、せ、セネラさんに、ししし、し、し招待ささされてきました。」

ヤベェ、体と歯が震える！！女の人が口を開いた。

「あら、そうなの！？何も用意出来てなくてごめんなさいね！！さぁ、こっちに座って！！」

あ、よかった。意外と気さくそう

「オラァ！！テメェら！！客が来ているんだから準備せんかい！！！」

……じゃねぇ。撤回！全ッ然気さくじゃねぇ！！やっぱり怖い！！二人のお兄さんなんて蹴られて１０メートルぐらいぶっ飛んだんですけど！！

「君達は……どこから来たのかな？」

ジャイ……違った、族長様が唐突に言った。

「セネラに招待されるということは、あなた方はよほどの実力を持っているのだろう？」

「俺達は……異世界から来ました。カイン？セプルです。こちらはメレン？マチル。」

その後、俺達がここに来たいきさつを話して、前回の最初に至るわけだ。

どうやらこの集落には７０００００００００年前の呪術師（シャーマン）による予言が言い伝えられているらしい。

その予言が、遠い遠い未来、この世に邪な者の魔の手がせまる。その時、異世界から赴いてきた剣を持つ少年、魔法を操る少女が邪なる者打ち滅ぼさん。という物だ。

そのシャーマンの占いが１００％当たるから、この予言も今までずっと語り続けられてきたのだそうだ。

すると、俺達の運命７０００００００００年前から定められていたのか？なんか、急に複雑な気分になった。そんな地球生まれる前から決まっていたとは……。

「というわけで、あなた方がこの集落を襲う“モモフフ”を倒してくれるのですね？」

何モモフフって？聞いてみると集落を襲う凶暴な魔物なのだと言う。なんか、イメージではモコモコした小動物しか浮かんでこないんだが……。

「わかりました。しかし、一つお願いがあります。」

「なんだ？礼ならきちんとするぞ？」

「今日１日、ここに泊めていただきたいのです。メレンももう、疲れきっていますので。」

「もちろんだ。宿屋の主人には連絡しておこう。タダで泊めてもらえるはずだ。」

「ありがとうございます。」

そして宿屋へ。部屋は1部屋しか無いようだが、別にいい。メレンをベッドに寝かせた。俺は床で寝ればいいだろう。

俺は暇つぶしに魔法で字を翻訳し、この国の法律本（そっちで言う六法）を読みふけった。

第１５章　集落（続き）（後書き）

ＤＳｉからの投稿ダルい……。時間かかるし（一つ書くのに３時間）、容量短いし……。

あ、次回はメレン視点です。

第１６章　聞き込み（前書き）

メレン視点だよ。

第16章　聞き込み

……ん……よく寝た……。

昨日黒豹吹っ飛ばしてからの記憶があんまり無い……投げ飛ばされたのと……小学生って言われて大爆発起こしたぐらい……ここ、集落？

私はベッドから起き上がった。と、腕に何か当たった。あ……カインだ。

私はベッドから降りる……このベッド、明らかにシングルベッドだ。こんな狭いベッドにわざわざ二人で……。

変な事考えてたのかなぁ……あ、カインが起きた。私はカインに尋ねた。

「ねぇ、カイン。こんな狭いベッドでわざわざ隣で寝るって……もしかして……」

「お前は何を考えているんだ！！」

カインが思いっきり否定した。本当かなぁ……。

「メレン、机に置いてある本、よく読んでみろ。」

私は法律本を魔法で翻訳して読んでみる……えーっと、“家や宿屋など、ベッド、布団が用意されている場所で床に寝ることは大変失礼にあたる。野宿を除いて床、地面で寝ることを禁止する。又、宿屋の主人は、部屋を見て、宿泊者が床で寝ているのをみたら、罰

を与えても構わない。”

「カイン、ごめんなさい。」

「いや、別にいいよ。」

私は即座に謝った。う～ん、こんな法律があつたなんて……。カインによると部屋を一つしかとれなかったみたいだからしょうがないか……。

「でも本当にいやらしい事やってないの？正直に言ってね？」

「やってないって！！信じて！！」

あっちの世界にいた時はよく痴漢にあった。みんな町長の娘とは知らずにやって、後に始末されたんだけどね。

「メレン、俺は族長様の所にいってくる。聞きたいことがあるからな。お前は、しばらく自由にしててていいぞ。」

「私はいっちゃ駄目なの？」

「お前は……行かない方がいい。」

「なんでー！？行きたい！！昨日はよく覚えてないし！！」

「いいから、来ない方がいい。理由は……言ったら俺が殺される。」

ちっ、しょうがないなぁ。私はカインを見送って、朝食を食べに下

におりていった。

うげげっ、はちのこが２０センチにでっかくなったのが丸ごとソテーにされている。ナイフで刺したら茶色い体液と内蔵とおぼしき物体が……うぇ……。

現代の食事（もちろんあっちの世界）に入り浸って過ごしてきた者にとって、この食事は……無理。

私は結局一口も食べずに、部屋に上がった。この宿、風呂は……無い、残念。

しかたない、私は外に出て、カインが行った族長の所に行った。カインにはダメと言われたが、どうしても気になる。

２０分後……

着いた。大きなお家。私はバレないように壁に耳を当て、盗み聞きをした。

「それで、モモフフっていうのは……」

カインの声だ。族長に何か聞いてる。でも、モモフフって何だろう？

「モモフフは凶暴な魔物だ。激しく暴れて、力も強く、わしらにはどうにもならん。」

今の声が族長？

「で、そのモモフフを倒してほしいと。」

「そうだ。」

集落を困らせているのがモモフフって魔物ね。でも、何故だろう。可愛いモコモコした生き物しかイメージ湧いてこない。

そろそろ戻ろう。そして帰ろうとすると、

「お、君は昨日の……」

なんか身長3メートルぐらいの巨人と出会った。もしかしたらここに住んでいる人？

「うわぁぁぁぁ！！」

私はものすごくびっくりして、逃げ帰った。だって東洋の巨人より1メートル大きいんだよ！！？こんなのがいきなりでたら誰でも怯えると思う。

もう盗み聞きはおしまい。私は集落の人にモモフフの事を聞くことにした。

「モモフフ？この辺を住処にしてる凶暴な魔物だよ。力が強いし、よく暴れるし、いつも迷惑しているんだ。」

どの人もこんな感じだ。しょうがないので、どんな姿聞いてみると、

「ほら、こんなのだよ。」

と、絵を描いてくれた。何、この生き物。真っ黒でものすごく太っ

たトカゲみたいな奴だった。大きさは４５ニュニュ……１ニュニュって何センチ？

ニュニュを知らないと言うと、このぐらいだ、と地面にラインを引いた。……でかい。１０メートルぐらいある。こんなのが暴れたら困るのも当然か。

そして、私がモコモコした可愛いのを想像した、と言ったら、何故？という顔をされた。

「モモフフっていうのは、ここの集落の昔の言葉で“暴走”っていう意味だよ。まさに暴走って感じで暴れ回っているからね。」

「そうですか。ありがとうございます。」

そうして私は宿に戻り、旅の準備をした。５分後、カインが帰ってきた。

第１６章　聞き込み（後書き）

ＤＳｉ容量少ねぇ……続きは次回で。

第17章　再び森へ（前書き）

だんだん投稿遅れてる……すいません、多分冬休み終わったら更に遅れます。

第17章　再び森へ

俺はメレンを宿屋に残して族長様の家に向かった。この集落を困らせているというモモフフについて聞きたい事があったからだ。

メレンは俺について行きたがったが、あんな巨人家族を見たら怖がって面倒な事になる。

理由を言ったら殺されると言うのは、メレンに怪物一家が居るから行かないほうがいいなどと言ったら侮辱で極刑だからだ。

歩いて２０分後……。

やっと着いた。昨日は何時間も歩いたし、族長様の家と宿屋の往復はメレンを背負って行ったから足が痛い。せめてこの往復４０分、どうにかならんか。

「失礼しま…うおぉ！！」

本当に失礼で申し訳ありません。しかし、ドアを開けた途端、あのマッチョな女の人が視界に現れたら、どんなに肝っ玉の大きい人でもビビるだろう。

「あら、いらっしゃい。主人に用があるんでしょ？」

俺はこくこくと頷く。そして、俺は奥へと案内された。

「おぉ、カイン君か。何か聞きたい事があるようだが？」

「はい、この集落を困らせているモモフフについて聞きたいのですが……。」

「いいだろう。で、何が聞きたいんだ？」

「では、まず、モモフフというのは、どういう生き物なのですか？」

「とても凶暴な魔物だ。暴れだしたら手がつけられん。」

「で、そのモモフフを退治してほしいんですね？」

「そうだ。わしらにはどうすることもできんからな。」

「うわあぁぁぁぁ！」

今の悲鳴、もしかして……今はいいや。

「で、そのモモフフの姿はどのようなものなんですか？」

すると、族長様は紙と万年筆のようなものを取り出し、絵を描き始めた。

「ほれ、これがモモフフじゃ。」

……なんだろう。想像していたのと全く違う。イメージではモコモコした小動物なのに、実際は黒く、太ったトカゲのような生き物だった。

「はぁ……なんか、イメージしたのと違います。」

「モモフフは古語で暴走という意味だ。まさに見境なく暴走するからな。」

「古語という事は……モモフフは太古からいたのですか？」

「いままで生きてきたのではなく、ずっと子孫を残していたのだ。奴は雌雄同体で、一匹で受精卵を作ることができる。そこから生まれた子供は、しばらく親の体内で生活し、親が死んだら体内から出てくるのだ。つまり、モモフフは一匹殺しさえできれば、そこで絶滅する。」

「じゃあ、うじゃうじゃいるモモフフを殲滅させるとかじゃなく、一匹倒せばいいんですね？」

これは良かった。こんな気持ち悪いトカゲみたいな奴がうじゃうじゃいるのは想像したくもない。

「しかし、気をつけろ。奴は最近までは、こちらから何かしない限り暴れなかったのだが、最近になって、見境なく暴れ出したのだからな。」

最近になって……か。やっぱりこの世界を支配しようとしている奴らの影響かなぁ？

「分かりました。ありがとうございました。では、これから、討伐に向かいます。」

「わかった。気をつけろよ。」

俺は家を出て、宿屋へ向かった。

それから歩いて２０分。本当にどうにかならないかな。この距離。
とにかく俺は宿屋にたどり着いた。
「おかえりー。」
メレンが出迎える。しかし……。
「メレン、お前、族長様の家まで来てただろ。叫び声聞こえたぞ。くるなって言っただろ。」
「だって、気になったんだもん……巨人一家なら、早く言ってよ！」
「この集落の人達に暴言として受け止められたら極刑だろうが！来るなって言われたんだから来るなよ！」
「だって……カインが私に隠し事してるみたいで、嫌だったもん……。」
メレンが目の端に涙をためつつ言った。
「あぁもう、泣くな。悪く思ったのならごめん。俺が説明しとけばよかった。ごめんな。だから泣くな。」
そういえばコイツ、俺より年上なんだよな……。こいつ、精神年齢は見た目と同じくらいか？
「ほら、敵の情報はわかった。いくぞ、森に。準備は整ったか？」

「うん！」

メレンが泣き止んで頷く。俺達は宿屋を出て、森へむかった。目標はもちろん、この集落を困らせている、モモフフを倒すためだ。

俺達二人は、再び森に入り、どんどん奥地を目指していった。

第１７章　再び森へ（後書き）

第１６章と台詞違うとこあるかも……あったらすいません。

次回もカイン視点です。

第１８章　討伐隊

「さて、行こうか。」

俺はメレンと共に森へ向かっていく。しかし、いざ行こうと思ったら邪魔者が。

「お待ち下さい！！」

誰だよ、せっかくのいい雰囲気を（いい雰囲気は俺の独断）台無しにしやがって……、見てみると、肌が黒くてひょろっとした青年が１名。色白の二枚目が２名、一人は金髪のキザそうな奴、もう一人は黒髪で真面目そうな奴。で、もう一人赤髪ショートヘアの１０歳ぐらいの女の子。

「私達もお供させて下さい！！よそ者だけに事を押し付けて、黙って見てるだけなど
できません！！必ずしも役にたって見せます！！どうか！！」

肌黒がこちらに訴えてくる。

「よし分かった、帰れ。」

「何故ですか！！？あなた方の役にたちたい！！それに、ただ黙って見てるだけなんてガルド兵士の名が廃れます！！」

へぇ～、この集落、ガルドっていうのか、じゃなくて、

「いえ、俺達はこの集落を守る為、ここに来たのです。なのに、集

落に住んでいるあなた方を危険な目に遭わせたくはありません。」

俺がそう説明すると、二枚目の金髪の方が俺に話しかけてきた。

「いや～、僕達の方こそ、よその人達を危険な目にあわす訳にはいかないよ。本来自分達でどうにかしないといけないのに、他の人に頼りっきりで、しかも危ない目にあわせるなんて、僕はいけないと思うな。それに、君達は異世界から来たんでしょ？モモフフの巣の道案内とか、食べ物の毒がどうとか、そういう点でも役にたつと思うよ？それに何よりも、君達みたいな少年少女を二人だけで行かせるって、僕からしてみたら、不安でしょうがないよ。必ず役にたってみせるよ。連れて行ってくれ。」

メレンが俺に言った。

「別にいいじゃん。仲間が増えて損は無いと思うよ？それに、金髪の人が言っている事も間違ってないし。」

「う～ん……分かった。でも、赤髪の女の子は……連れていかない。」

「え～～～～っ！！？どうして！？なんであたしだけ仲間ハズレなの！！？」

赤髪少女が俺に文句を言ってくる。しかし、俺は少女をできるだけ優しく諭そうとした。

「君はまだ幼すぎる。大怪我をしたり、ましてや死んでしまったりするのが嫌なんだ。だから、君はこの集落に残っておいてほしいんだ。」

「危ない目ならいつもあってるもん！！それに、あたしは上級剣士よ！馬鹿にしないで！！」

「いや、馬鹿にしている訳じゃなくて……」

結局、この女の子もついて来る事になった。無理はするなと念を押したが……全く聞く耳を持ってくれなかった。馬鹿にされた（と思っている）のが悔しかったようだ。

「私はユド。上級剣士1級です。以後よろしくお願いします。」

黒い青年が挨拶した。

「……サネス。……上級弓師1級……よろしく。」

二枚目の黒髪が無愛想に挨拶した。そういえばサネスさんだけ、さっきのやりとりで一言も喋ってない。

「リッドで～す。上級剣士3級と中級魔法特級で～す。よろしく～。」

サネスさんとは打って変わって、随分軽い感じで金髪二枚目が挨拶した。

「あたしリリ。上級剣士準2級。よろしく。」

赤髪女の子が簡単に挨拶した。この子もかなり無愛想だ。それに気付いたリッドさんが俺達に言った。

「ごめんね～、この2人無愛想でさ～。この兄妹かなり似てないんだけど、無愛想な所は妙に似ていてさぁ～。まぁ、本当はいいヤツだからさ。許してやって。」

「へぇ、この二人、兄妹ねぇ……。」

確かに髪の色も似てない、目の色も違う、顔もまったく似てない、サネスさんはほとんど喋らないが、リリちゃんは結構喋る方だ。しかし、どこか無愛想な所は似ている。やはり兄妹か。

「あたしはこんな兄様、嫌い。だって、一緒にいてもつまんない。本ばっかり読んでて、まるであたしがいないかのように。すぐ近くにいるのに！」

「あぁ、俺だってお前なんぞ嫌いだ。お前みたいな口やかましい奴、そばにいても迷惑だからな。」

二人とも嘘だ。リリちゃんはサネスさんにぴったり張り付いているし、サネスさんだって、片腕でリリちゃんを抱いている。照れくさいのだろうか。

「サネス、リリ。もうそれくらいにして。では、カインさん。これより森の奥へ向かいましょう。」

この色黒は……えーっと……あ、そうだ。ユドさんだ。ユドさんが言った。でも、何故俺の名を知っている？

「はい、そうですね。行きましょう。」

こうしてモモフフ討伐隊6人は、森の奥へと向かっていった。

第１８章　討伐隊（後書き）

なんか一気に仲間が増えました。モモフフ討伐までは一緒にいる４人です。

目立たない色黒と、シャイな黒髪二枚目と、二枚目と三枚目を兼ね備えた金髪と、少々口うるさい赤髪少女ですよ。

モモフフ討伐の後は……まだ考えてません。

第１９章　世界の違い（前半）（前書き）

最初に言っておきます。ごめんなさい、ＤＳｉの容量により、非常に中途半端に終わります。ご了承ください。

第１９章　世界の違い（前半）

俺達、魔物討伐隊６人はどんどん森の奥へ進んでいく。目指すは、モモフフの根城。威勢よく行ったものの、ユドさんによると、９日かかるらしい。９日間、ずっと歩きっぱなしかい？

歩き始めて２日。正直メチャメチャつらいです。毎日１０時間程歩く。飯の時間には狩りもする。この狩りがまたつらいこと。なんたって獲物はウサギとかキツネとかのレベルじゃない。ＣＴがロケットパンチで爆殺したあの怪鳥だったり、そっちの世界では絶滅してるハズのジャイアントモア（鳥の一種）だったり（この世界での呼び名も“ジャイアントモア”）、この前城で出された料理で唐揚げにされてたでっかい蚊のような羽虫だったり……。

しかも、ジャイアントモアはメッチャ力強いし、蚊のような羽虫は超々高速（時速１０００ゴナらしい。）だし、これが大変で……。

俺はこれを毎日やる程の体力は無い。それは他の人達も同じで、狩りをする係は、俺とユドさん、リッドさんとサネスさんの交代でやっている（女子二人は狩りはやらない）。

で、歩き続けて８時間。今日はここまで。これから狩り。今日はリッドさんとサネスさんが狩りの係である。俺は近くの木から、果物を取っている。この果物も奇妙で、綺麗な青い立方体だった。

「リリちゃん、これ、食べれるの？」

俺は、赤髪ショートのリリちゃんに尋ねた。こういう時、詳しい人、助かる。

「あまり美味しくないけど、食べられるよ。でも、種には睡眠作用があるから。」

「分かった。ありがと！」

まぁ、種食わなければ大丈夫だろう。俺はこの実を４つ、もいでいくことにした。

「おーーーーい！！」

あ、リッドさんが戻ってきた。後からサネスさんもついてくる。リッドさんは肩に、大きな鹿のような動物を担いでいた。

「あ、兄様！！どうだったー？」

リリちゃんが兄のサネスさんの元に駆け寄って、腰にしがみつく。

「暑苦しいから離れろ、べったりはりつくな。」

黒髪二枚目のサネスさんがリリちゃんに言った。普段はものすごく無口で、喋る方が珍しいのだが、リリちゃんとは結構会話をする。兄妹だからだろうか。

「いやー、コイツ（鹿）が暴れて手間取ってさぁ～、一時は逃げられるかと思ったけど、捕まえられて良かったよ。」

金髪二枚目のリッドさんが言った。随分陽気な性格である。サネスさんとは親友なのだそうだが、ここまで正反対な二人、よく気が合ったなぁ、と思う。

「さぁ、ご飯にしようか。」

リッドさんがそう言って、調理用ナイフを取り出した。一言も話さず、鹿を捌いていく。リリちゃんは、サネスさんが別の方向を向かせていた。これ、結構グロテスクなシーンである。

１０分後、リッドさんが鹿を捌き終わった。鹿は見事に骨付き肉にされている。

「メレンちゃん、火おこして。」

リッドさんがメレンに言った。メレンは落ち葉に向かって手をかざし、火をつけた。魔法を使えば、火おこしも簡単だ。

「リッドさん、果物採っておきました。」

「あぁ、ありがと。」

俺はリッドさんに果物を放り投げる。それを受け取ったリッドさんはナイフで切り分けていった。

「ご飯できたよー！」

１０分後、リッドさんがみんなに言った。鹿の肉は所々生焼けだが、サネスさんとリリちゃんが気にせず食べてるから大丈夫だろう。

俺も食べてみる……非常に柔らかくて食べやすいのだが……。

「苦っ……なんだこれ……。」

メレンも同じようで、ものすごく顔をしかめている。他の人は、不思議そうな顔をしている。ブラッドメイド（紅いヘッドドレスのような果物。メチャメチャ辛い）の時も思ったが、こっちの世界の人達と、俺達の世界の人達では、味覚が違うんじゃないか？

「なんで苦いの？全然そんな味しないよ？」

リリちゃんが言った。うん、これで確信した。絶対味覚が違う。そうじゃなかったら苦くないなどとは言わん。

「う～ん……やっぱり味覚が違う……。」

「え？味覚障害なの？」

リッドさんが聞いてきた。俺は笑ってかえす。

「違いますよ。元々住んでる世界が違うから、味覚も違うんですよ。ブラッドメイドなんて、ひとかけらで悶絶する程辛かったり……。」

「う～ん、確かにブラッドメイドは辛い果物で有名ですが、悶絶する程では……。」

ユドさんが言った。そこまで辛くないだと？ひとかけらだけでも獅子唐辛子丸ごと一気呑み（俺が小さい時にやっちゃった失態）より辛かったぞ？味覚の違いって、感じ方（濃い、薄い）か？しかし、肉の味は確実に違っていた。味の濃い薄いとかではなく。

第１９章　世界の違い（前半）（後書き）

次回、続きをやります。すいません、尻切れとんぼで。

第２０章　世界の違い（後半）

「でもさぁ～、味覚が違うって、食事の時凄く大変じゃない？」

リッドさんが聞いてきた。

「まぁ、ちゃんと美味しく感じる物もありますから、大丈夫ですよ。」

あのデカい紫ミカン（名前は知らん。）とか、羽虫の唐揚げとか、蝶の羽入り味噌汁とか。

「そういえば、あなた方はこの世界に来るまでは、どのような所に住んでいたんですか？味覚が違うなら、相当変わった場所なのですか？」

ユドさんが聞いてきた。確かに、この世界とあっちの世界は随分かけ離れている。しかし、どう説明すればいいのやら。ビルなんかの建物は無い。テレビなんかの家電も無い。……とりあえず、住んでいる環境、建物、電化製品など、いろんな事を教えた。

話し始めて３０分。大体話し終わった。

「なんか……随分凄い所に住んでるんだねぇ……羨ましいような、そうでもないような……。」

「一つの建物に沢山の人が、しかも赤の他人同士が住むなんて、想像できませんね……。」

「……テレビ……気になる……。」

「クルマとか、ヒコーキとか、フネとか、乗ってみたい……かも。」

誰のセリフかは、簡単に分かるだろう。にしても、随分技術のない世界だ。ビルとか、家電とか、コンビニとか、そんなのは一つも無いのだから。

……あれ？そういえばこの前、ＣＴが“異世界の技術力舐めんなよ。”と言っていた。かく言うアイツもアニマロイドという、こっちの世界では到底つくれないような奴ではないか。これは一体……。

「そういえばこの世界にもアニマロイドとか、こっちの世界の技術力では、到底できない事をやってるんですが、それはどうやって……。」

「あぁ、あれは、今の技術ではできない事を魔法で無理やりやってるだけだよ。だから、アニマロイドとか、常識外れた物もつくれるんだ。君達の世界では、魔法が無いから、僕らの世界より、断然技術進んでるはずだよ。」

「まぁ、でも、魔法を使うからこそ、できる事もあるのですが。アニマロイドがいい例ですよ。因みに今、この国の保安支部は、この世界を支配しようとする輩に対抗するべく、完全型人造人間（ヒューマノイド）をつくろうとしてるらしいです。」

「人造人間？」

「はい。見た目、肌の感触は普通の人間と同じですが、ものすごい力を持っているらしいです。何でも、見た目を普通の人と同じにするのは、単なる一般人に見せるカムフラージュだそうです。継ぎ目だらけとかだったら、怪しまれますからね。しかも、自分で物事を考えるＡＩ搭載、成長、老化などが進行し、一般人同様、食事、排泄、睡眠を行い、きちんと体内に消化器官ももっているそうです。果てには生殖能力まであるとも言われています。」

ユドさんが言った。なんか、メッチャ凄いな。何故生殖能力つけるのかがよく分からないが。

「その人造人間って、人を改造するの？」

メレンがユドさんに聞いた。

「いいえ、人体を何も無い所からつくって、そこにＡＩを搭載するのです。」

「それって、人の道から外れてるんじゃないの？」

「ん、どういう意味ですか？」

「普通は女の人が２７０日くらいかけて産むのに、ＡＩ搭載で人間をホイホイ作っていいの？」

メレンがユドさんに言った。メレンの言いたい事も分かる。

「しかし、その人造人間は、この危機的状況を救う為につくられるのです。酷いと思うかもしれませんが、人の道がどうとか言っている事態ではありません。」

「でも、その作られた人達は、どんな事を考えると思う？ＡＩ搭載してるから、自分は戦う事の為だけに生まれたとか、自分の戦う事以外の存在意義とか、考えると思うよ？」

そしてメレンはこう付け加えた。

「もちろん、そんな事考える感情があれば、だけど。」

「う～ん、俺はそんな事あまり考えなかったなあ……。他の人もそんな事言わなかったし、これも、世界の違いなのかねぇ……。」

リッドさんが呟いた。

こうして、この夜は、やや暗いムードのまま、幕を閉じたのである。

第21章　狩猟（危険度大）

「で、コイツどうする？」

「……ぶった斬る……。」

「まぁ、障害には間違いありませんし。」

「サクッとぶった斬って晩御飯にでもしようか。」

「アレを食べるの？なんか、不味そう。」

「ま、斬る事は決まったんだから、さっさとやろうよ。」

上から、俺、サネスさん、ユドさん、リッドさん、リリちゃん、メレンの順である。何故こんな事話してるかというとだ……。

なんとなくムードが悪くなった次の日、そのことは一旦水に流して歩き始めたのだが、歩き始めて2時間半、俺らの目の前に体長7メートル程の青色のティラノサウルスみたいな生き物が立ちふさがったのだ。

リッドさんとユドさん曰わく、コイツはバナサラムといって、非常に凶暴な生き物らしい。力が強く、足も速く、オマケに麻痺作用のある毒を吐くらしい。

毒を溜めておく袋を除いたら、食べる事ができるらしく、どうせ斬るなら飯にしようとか話していたのだ。

「チイィィィィィ！！！」

バナサラムが雄叫びをあげた。想像では、ギャァァァァ！！とかグオォォォ！！とか鳴くと思っていたので、初めて聞いたときはコイツが発したものとはしばらく気づかなかった。

うん、こっちの命狙おうとしてるヤツが目の前にいるのに、よく呑気に話す事ができたものだ。そろそろ狩ろう。

さて、以前、普段魔力が無い世界（そっちの世界）で魔力の素質がある人は、元々魔力のある世界に住んでいる人より、数段強いという話があったのを覚えているだろうか。

そう、俺とメレンはこの世界では、そこら辺の人より強いのだ。

「はあぁぁぁぁ！！！」

メレンが腕を上に挙げ、一気に振り下ろすと、空からデ×ープ？インパクト（もちろん本家より威力はずっと低い）のような隕石が降ってきたのだ。

威力を低くしたといってもその威力は恐ろしく、バリアで身を守った俺達はなんともなかったが、隕石の落下地点の半径４０メートルが焼け野原になってしまった。もはや超常現象である。

もう一つ驚いたのは、爆風の中心にいたにも関わらず、まだ生きているバナサラムである。何故生きてるんだ？

「チイィィィィ！！」

バナサラムが唸って毒を吐き出した。緑色でドロドロした液体である。なんとも気色悪い。

ま、バリア展開したままだから気色悪さに吐き気がこみ上げてしばらくうずくまっていても大丈夫だったが。

ええい、さっさとぶった斬ってしまおう。そして、夕方の面倒な狩りをしなくていいようにするんだ！！（今日の狩りの係は俺達。）

「でりゃあぁぁぁぁ！！！」

俺はそう叫んで剣の先から衝撃波を飛ばした。これで真っ二つになっちまえ！！

バキィィン！！

……衝撃波が砕け散った。バナサラムは真っ二つになるわけでもなく、切り傷ができるわけでもなく、至って無傷。おいおい、どうすりゃいいんだよ。

「ゼェェェェイ！！」

「おりゃぁぁぁ！！！」

リリちゃんとユドさんが切りかかった。セリフはリリちゃんが上、ユドさんが下。

ガキィィン！！

刃の当たる音はするのだが、切られた方は全くの無傷。逆に二人の

剣が欠けてしまった。……って、これ、ヤバくね？

「チイィィィ！！」

バナサラムが怒って麻痺毒を吐き出す。ユドさんはかわしたが、リリちゃんはタイミングが遅れて体に当たってしまった。

「……ッ！！」

リリちゃんが膝をつく、ヤバい。バナサラムがリリちゃんに襲いかかる……。

「オイ、俺の妹に何しやがる？」

突然、サネスさんが間に割り込み、背中の矢筒から矢を取り出し、それでバナサラムを目を突き刺した。

バナサラムが悲鳴をあげのけぞる。その隙にサネスさんはリリちゃんを担いで距離をとった。

「オイ、リリ、大丈夫か？怪我は？」

「う……うわぁぁーーん！！怖かったぁーーー！！」

リリちゃんがわっと泣き出した。サネスさんはリリちゃんを抱いて、もう大丈夫だと慰めていた。

バナサラムが再びこちらに狙いを定める。……あ、よくよく考えたら、コイツ、簡単に倒せないか？

「むぅぅ……ハッ！！」

俺はバナサラムの周りにバリアを張った。そして、そのバリアの中を、窒素と二酸化炭素でいっぱいにしたのだ。

いくら強い生き物でも、酸素が無ければ生きていけない。毒ガスを使わないのは、もちろん後で食べる為である。

作戦成功。バナサラムは次第に苦しみ出して、そして、そのまま動かなくなった。道徳的な問題のある極めて残虐な殺し方だったが、それはひとまず置いておく。

俺達は、コイツを、狩った！！！

第２１章　狩猟（危険度大）（後書き）

うん、そろそろ残酷な描写ありのタグつけよう。窒息死は残酷すぎます。書く方もいい気はしないし、容量の都合で、詳しくは書きませんでしたが。

次回はメレン視点の予定。

第２２章　休憩（前半）（前書き）

誤植の訂正、サブタイトルの“世界の違い（後編）”を“世界の違い（後半）”に直しました（その前は“前半”と書いていた。）。

今回、メレン視点。

第２２章　休憩（前半）

カインが道徳的な観点から見ると、大いに問題のある方法でバナサラムを葬ったあと、私は急いでリリの方へ向かった。リリはバナサラムの麻痺毒を浴びて、動きがとれなくなってしまったのだ。

リリは余程怖かったのか、バナサラムを葬った後も、ずっとサネスさんにしがみついて泣きじゃくっていた。

「にしても……ピンチの妹を体をはって守る……男、いや、漢だねぇ……。」

「……うっせ。」

リッドさんがサネスさんをからかう。サネスさんは、普段はリリを悪く言っているが、本当はとても大切にしてる。

「リリ、大丈夫？動ける？痛くない？」

私はリリを心配し、安否を確かめる。麻痺液を直接くらったから、相当酷いのでは……。

「大丈夫……まだ、動けないけど。」

「文献には、バナサラムの麻痺毒は２日で消えるとありました。２日間は不便ですが、ちゃんと元に戻りますよ。」

えーっと……あぁ、ユドさんだ。ユドさんが言った。……この人、存在感薄いなぁ……名前、覚えておかないと。

と、その時後ろから下品な響きが。

「……おぇっ……。」

……。

なんかカインが体調不良を起こしてる。何があんの？私が後ろを振り返ると、そこには……。

「……げげっ……。」

白目剥いたバナサラムの死骸の口から、緑色のドロドロした液体が……ヤバい。これは見ていて吐き気がする。コイツ、本当に食べられるの？

「さて、切り分けて、食べようか。」

リッドさん……本気（マジ）ですか？

数時間後……。

私達は、2日間の足止めをせざるをえなくなった。何故かって？

サネスさんがバナサラムの麻痺毒で動けなくなったからだよ。

どうやらサネスさんはリリに付着した毒液に触れてしまったようだ。その毒の量が少なかったから、動けなくなるのが遅れたと。そういう訳だ。

リリ一人なら、担いで歩いて行くのもできるのだが、大柄なサネスさん（身長１９０センチ程）を担いで、ましてや歩くのは、とてもじゃないけど無理だった。

まぁ、最近ずっと歩きっぱなしで疲れていなから、たまには休憩もいいだろう、ということになったから、足止めとは思わないんだけどね。

さぁ、ご飯だ。奇妙キテレツな生き物だ。

一時間後……。

肉の一切れが私の顔ぐらい大きいのと、元々バナサラムの肉は熱を通しづらいので、焼くだけで１時間ぐらいかかってしまった。

で、私は今、この青い肉は、美味しいのか？などと思いながら肉塊を手に持っているのである。

普通、食べ物が青色だと食欲がわかなくなるという。私もその例に漏れず、この肉を前に、なかなか食欲がわかないのだ。

恐る恐る食べてみる……！！……こ、これは……。

「……うん、無味。」

そう。味が全くしない。食感は硬めの牛肉みたいなのだが、味は口に何もいれない状態の時舌が感じている味、つまり無味。いや、しないのだから感じるという表現はおかしいかも……まぁ、いっか。

しかし、私とカイン（味覚の違う者）とサネスさん（元々ものすご

く無表情な者）以外の3人はいかにも美味しそうに食べている。……いいなぁ……。

いままで気づかなかったけど、食べている物の味が無い事は、予想以上につらい。

「あ、もしかして、味覚の違いでメッチャ渋かったとか？」

リッドさんが私に言った。渋いなんてもんじゃない。私はそれに答えた。

「いいえ……無味です。」

「……はは……はははは……。」

リッドさんは何と答えればいいかわからなかったようで、ただ困ったように笑っていた。

調味料を持ってきていないため、この無味肉をどうにかすることもできず、味が無いのを我慢して食べるしかなかった。

この無味肉を食べ終わった（もちろん全部は食べきれなかったが、持ち運ぶのは無理だった為余りは鳥のエサ。）後、私は寝床の用意の為、落ち葉をかき集めて布団を作った。

動けない兄妹を寝床に運ぶ際、リリは簡単に移動できたのだが（軽いから）、サネスさんはそう簡単には持ち上がらず、リッドさんの提案により、

「よっ……と、どっこいしょ。」

「痛たッ、痛ッ、テメェ！何しやが、痛ッ！！」

サネスさんをゴロゴロ転がして寝床まで移動させたのだ。途中には小石とか結構あってかなり痛い。……可哀想に。

そういえば、サネスさんが叫んだの、始めて聞いた気がする。この人、叫べるのか。

ふあぁ……もう眠い。さっさと寝よ。

こうして、かなり危険な1日は幕を閉じた。

第２２章　休憩（前半）（後書き）

次回もメレン視点の予定。

第２３章　休憩（後半）（前書き）

私立入試、終わったあぁぁぁ！！！

そう、いままで週２ぐらいでやってたのに、前回から週１でやってたのは、私立入試のせい！！

これからまた週２回でやっていきたいと思ってます。

まぁ、まだ公立入試が３月にあるから、３月過ぎたらまた遅くなるかなぁ……。

あ、今回はメレン視点だよ。

第２３章　休憩（後半）

ガキィィィィン！！

ドオォォォォォン！！！

今、カインとリッドさんが激しく組み手をしている。カインが剣の稽古をして欲しいとリッドさんに頼んだ結果である。

さっきのドオォォォォン！！！という轟音は魔法で剣撃を飛ばし、それが大岩を砕いた時の音である。

ちなみにどちらも普通の剣でやっている。本気でやっているからどちらかが斬られたら死にそうだが、お構いなしに激しくやっている。

バキィィィィン！！！

「コラー！！こっちに飛ばすなぁー！！」

「うわ、悪ぃ！！うぉ！」

「よそ見すんなよ？オラァ！！」

こっちに飛んできたのを蹴って弾き飛ばし、私はカインに怒鳴った。で、一番下の台詞はリッドさん。稽古中は何故かテンションが高くなり、普段より口調が荒い。

で、ヒマな私は時々二人にボーガンを撃って邪魔している。二人とも矢を退けながらやっている。空気を圧縮して放っているから矢を

消耗することはない。

しかし、これ、退屈。雨アラレのように放ったり、爆風つけても面白そうだが、死んでしまったらどうしようもない。だから、ちまちま妨害程度にやっている。

あぁ、止め止め！！つまんない！！私は妨害を切り上げ、立ち上がった。

ギュウゥゥゥン！！

「バリアー。」

バキィィィィン！！

おお、できた。魔力を込めて言ったら本当にでたよ。バリアー。魔法凄い。

さ、行こ。

サネスさんとリリは少しずつなら動けるものの、まだ歩くまでには至らず、二人の組み手を傍観している。

リリはサネスさんにべったりくっついていて、なんだか嬉しそう。サネスさんは二言目にはどっかいけだの邪魔だのうるさく言っているが、口だけで実際には嫌じゃなさそうだ。

……なんだろう、急にリリが羨ましくなってきた。

よく考えれば、あっちの世界にいた頃の私はいつもお姉ちゃんやメリナに甘えていた。町長の娘だから近寄り難いっていうので、友達はあまりいなかったから、しょっちゅうお姉ちゃんに遊んでもらったものだ。

最近では、お姉ちゃんへの依存もあまりなくなったが、それでもたまに甘えていた。

この世界に来てから、誰かに甘えたいとか殆ど思わなかったけど、なんだかお姉ちゃんが恋しくなってしまった。

「……会いたいなぁ……。」

私は思わず呟いた。ＤＧが任務遂行するまで帰れないと言っていたから叶わない願いなんだけど。

他の人に甘えるのは……サネスさんはリリ一筋って感じだし、リッドさんはキザっぽいから何か甘えたくない。

カインは……容姿的にも性格的にもＯＫなんだけど……年下だから……。年下に甘えるのは、ちょっと……。

いや、もういいや。私だってもう高校２年生なんだから、そんな子供じみた事、任務が終わって帰った後でいい（結局甘えるのは変わりない）。

さて、散歩にでも行こう。暇つぶしにどっかその辺の探索でもすればいいや。

そして一人でぶらぶらしていると、可愛いチワワみたいな生き物が。

それを撫でると尻尾をふってすりよってくる……ああ、和む。
私はこの生き物を抱っこして、仲間のもとへ帰った。後はこの生き物と戯れておけばいいや。
「あ、メレン。その生き物ロッペだよ。」
リリが私が抱っこしている生き物を指さして言った。
「ロッペ？どんな生き物？」
「普段は人懐っこくて、人に甘えてくるんだけど、それで油断している隙に食べ物や光る物を盗む生き物。光る物を盗むのは、光る物に興味を持つから。」
「え？じゃあコイツも……？」
「うん。食べ物奪う機会をずっと待っていると思うよ。さっさと捨てた方がいいと思うけど。」
その時、私は自分でも何を考えているかよくわからなかった。ただ、この腹黒い生き物に対して、明らかな殺意を持っていたのは明らかだ。
「……で、コイツは食べれるの？」
「食べれるけど、あまり美味しくはないよ……って味覚が違うのか。って、もしかして……。」
「うん。そのもしかして。」

え、残虐？何とでも言え。私は甘えて油断してる時に物を盗むというセコい動物に、猛烈に腹が立っているんだ。私は今誰かに甘えたいと思っている時にだ。そういうのにつけ込んで悪事をするのはどうしても許せないんだよ。それに、カインだって残虐極まりない方法でバナサラムを殺したじゃん。

私はロッペに矢を撃って息の根を止めた。さぁ、コイツ、どう料理してやろうか……。

後で聞いたのだが、その時私はものすごく目つきが怖かったらしい。

第２３章　休憩（後半）（後書き）

メレンが今回残虐な行動をやったのは、自分の心を癒やしてくれる、と思った者は、実は裏で悪事を考えていた、というのにショックをうけたからですね。

メレンの心はデリケートのようです。前、カインが精神年齢は見た目相応と言っていましたが、まさにその通りです。

まぁ、次回は元に戻るでしょ。次回はカイン視点です。次回か、その次ぐらいに、モモフフがでてくるかなぁ……。

まぁ、あまり気にせずに待っててください。

それでは、また次回お会いしましょう。

あ、ユドさん忘れてた。

第２４章　ＶＳモモフフ（その１）（前書き）

週２回更新とかぬかしていたのに結局週１になって本当に申しわけありませんでした。

学校休む程じゃないけど風邪でやる気おこらなかったり、パスワード忘れたり、１日かけて家を大掃除したり、まぁ、色々あったんですよ。

しかも、高校は私立に行くか、公立を目指すか、という選択肢で、もの凄〜く悩んだりして、これは眼中にない時も１日あったんですよ。

はい、何言おうが言い訳以外の何でもないですね。本当にすいません。

これからも週１、ヘタしたら更に遅くなるかも……。

第２４章　ＶＳモモフフ（その１）

＞カイン視点＜

リリちゃんとサネスさんが動けるようになってから数日間、俺達はひたすら歩き続け、モモフフの巣を目指している。

順調に行けばあと４日で着けるという。まだまだ遠い。今時の若者には苦しい距離だ。特に女子。メレンとリリちゃんは相当疲れている。

……メレンは魔法で飛んで楽をしてた時もあったけど。その後、魔力使い果たして、過労で眠ってしまったり。

まあ、色々あったが、今は何事もなく、モモフフの元へ向かって

「#$¢#ーーーーー！！」

……なんか、文章では上手く表す事のできない生き物の鳴き声みたいなのが聞こえてきた。

右側から聞こえた。しかも、かなり近くにいる。俺は恐る恐るそちらを向いた。

「ｂ#£¢ーーーーー！！」

そこには、真っ黒で随分と太った大きなトカゲのような生き物がいた。……モモフフだ。とうとう現れやがった。

「とうとう来たね……みんな、気をつけろよ。ものすごく危険

だ。」

リッドさんが言った。言われなくてもわかる。コイツ、なんかまがまがしい気配を放っている。絶対危険だ。

「#※#$ーーーーー！！」

モモフフが叫びながら突進した。……って、速ッ！！アイツ、あんなに太った巨体なのに、尋常じゃない程速い。

俺達はなんとかそれをかわす。そしてユドさんが背中を切りつけた。

ズパァッ！！

モモフフの肉が裂けて真っ黒な血が吹き出した。しかし、モモフフは全く痛がっているように見えない。

すると、モモフフの傷はたちまち血が止まり、かさぶたができて、それが剥がれて、薄い線のような傷跡だけが残った。この間、約5秒。

……おい、斬撃効かないのかよ……。傷つけてもたちまち塞がるとは……。

「はあぁぁぁ！！」

「うらあぁぁぁ！！」

メレンとリッドサービスが火の玉をモモフフに命中させる。しかし、これは全く効いているようには見えない。

「うらあぁぁぁ！！」

俺は全力で剣を振り回し、モモフフの後ろ足を一本切り落とした。

「※♭#〒♪$♪♭ーーーーー！！」

モモフフが悲鳴をあげる。しかし、切断した部分から新しい足が生えて、平然と修復。これ、黒豹やバナサラムより厄介では……。

「相手周辺にバリアー！！」

俺はこうしてモモフフ周辺にバリアー展開。よし、こうしてバナサラムと同じように窒息

バキィィィン！！

……アイツ、バリアー壊しやがった。なんという力だろう。

サネスさんが矢を連射した。しかし、刺さった矢は簡単にモモフフの体から取れてしまい、傷口も修復。

「てりゃあぁぁぁ！！」

リリちゃんが切りかかる。しかし、連続で切りつけるものの全く効いていない。切りつけてもどんどん再生してしまう。

ドカアァァ！！

「キャアァァァ！！」

モモフフが尻尾を振り、リリちゃんを吹っ飛ばした。リリちゃんが悲鳴をあげる。リリちゃんはそのまま茂みに頭から入ってしまった。モモフフがリリちゃんを追い詰める。

と、その時、サネスさんが電光石火の速さでリリちゃんを担ぎ上げ、モモフフを蹴飛ばして怯ませ、一気に離れた。

リリちゃんは衝撃で気絶していた。口から血を流し、サネスさんによると肋骨が二本折れている。

「リッド、リリを連れて安全な所へ。そこで治療をしておいてくれ。」

サネスさんがリッドさんに言った。リッドさんは頷くと、リリちゃんを抱え、安全な所へリリちゃんを運んで行った。

ドカァァァァ！！

！！何があった！？振り返ると、メレンが吹っ飛ばされていた。モモフフの尻尾にやられたか……。

メレンは吹っ飛ばされたものの、意識はあるようで、地面にちゃんと着地した。

しかし……。

「……メレン？」

俺はメレンに呼びかけた。目の色が違う。気配も急にトゲトゲしく、

攻撃的な雰囲気だ。何があった？

メレンは俺の呼びかけには反応せず、モモフフに襲いかかった。思いっきりモモフフの顔面を蹴り飛ばす。グシャッと嫌な音が響き、モモフフの顔から血が吹き出た。

メレンは血を被っても全く動じることなく、次々に蹴りと矢を喰らわす。腹、足、首、尻尾と、次々と血まみれになった。

時々モモフフが反撃するが、メレンはそれを軽々とかわし、休む間もなく攻撃を加える。戦いは完全にメレンのペースとなっていた。

モモフフが痛々しく変貌した。全身血だらけで、まだ所々から血が吹き出している。再生はしているが、メレンの攻撃が激し過ぎて追いつかない。メレンはトドメをささんばかりにモモフフを蹴り飛ばした。

第２４章　ＶＳモモフフ（その１）（後書き）

やっぱり週１回でこれからもやっていくかもしれません。まぁ、気分次第で更新します。

そんなに間が開く事は多分無いので、ニ×ニ×動画なんかでありがちな、うｐ主失踪（小説でもうｐ主って言うのかなぁ？）なんてことにはならないので、週一回覗くぐらいに思って、気軽にお待ち下さい。

次回はメレン視点。

やっぱりユドさん影薄いなぁ……。

第２５章　ＶＳモモフフ（その２）（前書き）

公立受験やらない分（私立行く）時間に余裕が。だから投稿スピード早くなるかも。

勉強しなければならんのは分かってるよ？進学コースに行くんだし。

今回メレン視点です。

第２５章　ＶＳモモフフ（その２）

ドカアァァァ！！

私はモモフフの尻尾に吹っ飛ばされ、宙を飛んでいた。そして、その途中に完全に意識がなくなった。

気がついたら私はカインの目の前にいた。カインは呆然とこっちを見ている。

「……メレン？」

「え？……カイン……？どうしたの？」

「お前……今のは……。」

「私……何かしたの？」

「……覚えてないのか？」

「私、吹っ飛ばされて……気を失って……。」

カインは私に説明してくれた。私が吹っ飛ばされた後、急に気配が変わり、攻撃的になった事。モモフフに襲いかかり、徹底的に痛めつけた事。

見ると、モモフフが２０メートル程向こうで真っ黒な血にまみれ、ジタバタともがいている。私がやったのか？

私はふと手を見たら、真っ黒になっているのに気づいた。カインに聞くと、全身アイツの血で真っ黒だという。

……なんだろう、急に気分が……うえぇ……。

3分後……

はぁ…はぁ……やっと落ち着いた……とりあえず血は魔法で綺麗にした。ただ、服が真っ黒なのは……。

まぁ、いい。何はともあれ私がアイツを倒すチャンスを作ったんだ。今の隙にガンガン攻撃しよう。

（お前がチャンスを作ったんじゃねえよ。私が作ったんだ。）

……今の声は？

「カイン、今、何か言った？」

「いや……どうかしたのか？」

誰？誰が話しかけてきたの？

（気づかねぇか？ここだよ。ここ。）

「どこ？どこから話しかけているの？」

「メレン？どうした？」

「カイン、あなたこの声聞こえないの？」

「聞こえないが……お前には何か聞こえるのか？」

「うん……誰かが……。」

（ハッ、私の声がそいつに聞こえる訳ねぇだろ。）

「どうして？」

「メレン、お前、大丈夫か？」

（私はお前の心の中からお前に直接話をしているんだ。わからねぇか？）

「だから、カインには、声が聞こえないの？」

（あぁ、それと、私とは心で念じるだけで対話できる。いちいち声に出して話してたら変人だと思われるぜ？）

うん、わかった。で、あなたは誰？

（私？……私は、お前だ。逆を言えばお前は私。）

つまり、心の中にいるもう一人の私ってこと？

（そうだ。お前の中にいて、常にお前を通じて、お前が見ている物をみている。お前が喜んだら私も幸せで、お前が悲しんだらこっちまで暗くなる。そんな関係。）

でも、なんでそんなに口調が荒いの？

（わからねえか？それは……私はお前の反対の自分だからだ。いや、完璧に正反対ではないがな。普段の心優しいお前とは違う、攻撃的で犠牲を何とも思わない、時には残酷な事も平気でできる……

……そんな感情の詰まった人格、それが私。）

なんで今までは表に出て来なかったの？いつでも出てこれるんじゃないの？

（私はいつでも表に出られる訳じゃない。裏の人格は誰にでも宿っているが、普段の人格の方が気づいて、譲ってくれないと出られないんだ。しかも、こうやって心の中で人格同士を対話させる事のできる奴なんて１０億人に１人くらいしかいない。だから、裏の人格に気づくのは殆どいないんだ。）

ふーん、でも、私はあなたが出てきていいって許可してないよ？なんで表に出てこれたの？

（お前には強力な魔力がある。すなわち、私にも強力な魔力がある。許可云々なんて、魔法で簡単に解決できるさ。）

……それで、勝手に出てきたの？

（私が出てこなかったら、お前は死んでいた。お前が死ぬということは、私も一緒に死ぬということ。死にたくなかったからな。お前だって、死ぬのは嫌だろ？）

まぁ、そりゃそうだけど……。

（だから、私に感謝しろよ？あ、私が痛めつけたあの大トカゲもうそろそろ完全に回復するから。）

げ、マジで！？もう完治すんの？

（あぁ、後はお前らに任せる。そうそう、アイツ、回復をさせる間もなく攻撃しまくったらどんどん弱って最終的には死ぬから。ふわあぁ……久々に沢山喋って体動かしたからもう眠いわ……じゃあ、お休み、後頑張れよ……。）

ねぇ！ちょっとお！！！

（……ＺＺＺ……）

寝ちゃったよ……。無責任だなぁ……。

「……メレン？」

「あ、カイン、もう大丈夫だから。」

「……それならいいが……。」

「＆ａｍｐ；※＃＄ｰ〒％ーーーーーー！！！」

モモフフが叫び声をあげた。さぁ、戦闘再開だ。

第２５章　ＶＳモモフフ（その２）（後書き）

次回もメレン視点。

第２６章　ＶＳモモフフ（その３）（前書き）

今回メレン視点。

第２６章　ＶＳモモフフ（その３）

「さて、コイツ、どうする？」

「そりゃあ、“私”（裏の方）がさっきやったように、めった打ちにすれば……。」

「なんだか、最近どうも惨殺が多い気がしますが……まぁ、いいでしょう。」

「あぁ……絶対息の根を止める……。」

上から、カイン、私、……えーっと、誰だったっけ……、えーっと、あぁ、ユドさん、サネスさんの順だ。……ヤバい。ユドさんはマジで覚えとかないと。

まぁ、それは置いといて、完治したモモフフを前に、私達は作戦会議を立てている。

超高熱バリアで身を守りながら。これなら奴も攻撃できない。ただ、内側にいるこっちもかなり暑い。今結構汗かいてる。ムレる事はないけど。

「じゃ、会議は終わったから、バリア解除！！高温ビームとして放つ！！」

ドガアァァァ！！

あ、やっぱりあまり効いてない。火の玉放っても効かなかったから、

予想はしてたけどね。

「さぁ、かかれーーーーー！！！」

それからは、もう凄かった。斬撃、魔法、矢の雨アラレ。一時も休む事なくただひたすら攻撃、攻撃、攻撃。

そりゃあ、奴には反撃の暇すら与えない。取り囲んで、ただただめった打ち。可哀想にも感じるが、こうでもしないと死なないため、しょうがない。

……いや、殺しを“しょうがない”で済ませられる訳はないが、これは、ゴキブリやナメクジの駆除と同じような物。集落の人々の命がかかっている。やらねばならない。

……あぁ、そうだよ。殺しを正当化する事はできない。こいつに悪気はない。凶暴化させられて、暴れているだけ。凶暴化から解き放つ為に殺すとか、そういうのは何とでも言える。

でも、今の私には、集落を救うには、コイツを殺すしか思いつかない。もうやめる事はできない。それなら、次から、なるべく傷つけないようにするしかない。

……コイツを殺すのはもう変えられないんだ。だったらやりきるしかない。それなら、うろたえるな。非情になれ。ここでためらえば、迷惑になる。殺さなくてもよかったとか、そんな事は、終わってからでいい。

それでも、私の心の中に、罪悪感がふつふつと湧き上がる。コイツはわざわざ殺さなくてもいい、殺す以外の方法を考えなかった、と

……。

私は魔力で罪悪感を無理やり押さえ込んだ。非情にならないと、罪悪感に耐えきれない。

そして、しばらく猛攻を続け……モモフフは動かなくなった。再生もしない。死んだ。私達が……殺した。

私は、抑えこんでいた罪悪感を解放した。すぐに罪悪感が私の心を支配した。

私は泣いた。自分勝手な理由で悪気のない生き物を殺した。そう思うと、ロッペを殺した事でも、罪悪感が湧き上がる。

狩りで生き物を殺すのとは違った。狩りは生きる為。でも、この場合は、食べる為ではなく、自分勝手に殺した。

しかも、落ち着いて考えれば、わざわざ殺さずともよかった。魔力で浄化してやれば、凶暴化が解けるじゃないか。それで落ち着かせれば、凶暴化する前のように、被害が殆ど無くなったハズだ。

私は自分が嫌になった。何かあったら真っ先に原因を殺せばいいとしか考えなかった自分が嫌だった。

「メレン……。」

カインが私に話しかけた。カインもまた、悔やんでいるような表情をしている。

「……ねえ、カイン……。」

「……。」

「これからも、私達は、他の生き物を殺さないといけないの？……色んな生き物を……時には……人を……。」

「わからない……でも、これからも、殺すと思う……。」

「……慣れないといけないのかな……殺す……事に。」

カインは答えなかった。……慣れたくはない。慣れてしまったら……殺す事を何とも思わなくなってしまったら……そんな風に、なりたくない。ましてや、人の命をなんとも思わずに奪えるようになる事なんて、想像したくもない。

でも、今の私は、慣れてしまいそうで、なんとも思わずに人を殺せるようになってしまいそうで、怖い。

……慣れないようにしよう。この感覚を、魔法で心に刻み込もう。そうすれば、自分勝手に生き物を殺した時、この感覚を思い出せる。

殺さないようにはできないかもしれない。でも、殺す事に慣れる事だけは、絶対にないように。

よし、刻み込んだ。これで、私の思う最悪の事態（殺す事に慣れきって、手段を選ばず皆殺しなど）にはならないだろう。

「カイン、私はもう大丈夫。だから、リリの様子見に行こう。」

私は明るくそう言って、リリの元へ向かった。

第２７章　集落へ（前書き）

～言い訳タイム！！～

投稿三週間もかかって大変申し訳ありませんでした。

いやね、こっちも大変だったんですよ。ＤＳｉが急にネットにつながらなくなって、パソコンは相変わらず死んでるし、家庭の用事も沢山あって……

そんな訳で随分遅れました。しばらくＷｉｉでの投稿が続くと思うので、投稿スピード遅れると思いますが、これからもよろしくお願いします。

今回メレン視点。

第27章　集落へ

リリの様態は思ってた程酷くは無かった。骨折もちゃんと治療してあり、今は静かに寝息をたてている。

「いや～、もう終わったなんて、早かったね～。」

リッドさんが軽いテンションで話しかけてきた。懸命に治療していたようで、随分疲れたような顔をしている。

「あぁ。で、リリは大丈夫か？」

サネスさんがリッドさんに聞く、普段はシャイなのに、妹の事になるとよく喋る人だ。

「まあまあかな、折れた骨はつないだし、そこまでケガは酷く無かったしね。で、お二人さんは大丈夫？ケガ無い？」

「はい、大丈夫です。」

カインが答えた。確かに速攻で終わったから、あまりケガは無い。そういえば、私はモモフフにぶっ飛ばされたけど、不思議な事にあまり痛く無い。なぜだろう？裏の方の“私”に受け流したのだろうか。

（あぁ、その通りだよ。）

……寝てたんじゃなかったの？

（テメェが暴れたり泣いたり騒がしくしてるから起こされたんだよ。私は無断で外に出ることはできないが、見たり、聞いたり、感じたりすることはできるんだ。しかも、お前が無意識に痛みを受け流したおかげで、こちとらなかなか眠れねえんだよ。）

……なんかゴメン。

（あー、今度こそゆっくり寝るから、起こすなよ、じゃあな。）

言うだけ言っていっちゃった……。別にいいけどさ。

「どうしたの？メレンちゃん、なんか目が虚ろだったけど。」

「え？いえ、何でもありません！」

リッドさんに言われて初めて気づいた。“私”との対話の時、そんな目してるんだ……。

「……ならいいけど。で、目標を達成したから、集落に戻ろうよ。族長様が首長くして待ってるよ。」

あぁ、あの東洋の巨人みたいな人……私、ああいう見た目の人、なんか嫌なんだよなぁ……人を見た目でとやかく言ったら人間性を問われるけど。

「で、また9日程歩くんですか？」

カインが聞いた。また9日歩くってだるいね。集落から何千ゴナと離れているから仕方ないんだけど。

「もちろん。俺、瞬間移動魔法習ってないし、習ってたとしても、治療で魔力ほとんど使ったから、そんな魔力の消費激しいのは使えないよ。」

……マジっすか？

「う……う～ん……。」

あ、リリが目を覚ました。

「リリ、大丈夫か？」

サネスさんが聞いた。

「うん……大丈夫……。」

「あぁ、良かった。」

サネスさんが安心したように言った。

「リリちゃん、病み上がりで申し訳ないけど、帰る為に歩かないといけないから。歩ける？」

「うん、歩ける。」

「まあ、疲れてもおぶってくれるの（サネス）がいるから、無理しないでね～。」

「うん、いいよね、兄様？」

「……。……。……。……ああ。」

今、心の中ですごい葛藤無かった？私の気のせい？

「さ、行こ行こ。」

と言うわけで、私たちは集落へ向かって、引き返した。余談だけど、サネスさんがずっとブツブツ言いながらついてきた。

……誰か忘れてるような……まあ、いっか。気のせいだよね。

第２７章　集落へ（後書き）

次回はカイン視点の予定。

第２８章　帰り道で（前書き）

一時Ｗｉｉまでネットにつながらなくて、前の土曜に投稿しようと思ったのに……。

あぁ、もう、三週放ってた遅れを取り戻そうとしたのに、ますます遅れたよ。

これからは、週末に一回投稿（の予定。多分どんどん遅れる。すいません。）。

今回メレン視点。そういえば、カインよりメレンの方が多くなってるような……気のせいだよね。

それと、前、「次回はカイン視点。」とか言ってた気も……うん、気のせいだよね。気のせい気のせい。

第２８章　帰り道で

９日後……。

本当なら今日到着の予定だったのに、私達は今日も森の中を歩き続けている。その理由は簡単。

道に、迷った……。

だってどこも同じような景色だし、コンパスないし、コンパスないし、コンパスないし、

つまり方向間違えたんだよ。困ったなぁ……。

集落に住んでる三人なら、道に迷うなんてありえないとか、３日ぐらい前までは思ってたのに、その三人もここがどこかさっぱりわからないという……（あれ？なんか忘れてるような……）。

「ゴメン、俺が『道知ってる～、ついてきて～』とか言ったばかりに……。」

リッドさんが普段の明るい様子なんて嘘の様に暗い声で言った。確かに帰る時にこの人が先頭どんどん歩いて行ったんだけど……。責めるのはあまりにも酷だ。

でも、こんな陰湿な雰囲気はどうにかして欲しい。そうだ、魔法で気分を明るくさせれば……。

よし、実行。リッドさんの肩に手を置いて、気分が明るくなるように魔力を……。

五分後……。

「駄目だ……俺なんて生きてる意味がねぇ……。」

あ、あれ！？こんなハズじゃなかったのに！！本当ならテンションＭＡＸで明るくいくと思ったのに！！

「オイ、メレン……。」

カインが言った。

「お前、余計な事すんじゃねぇよ……。」

「ご、ごめんなさい……。」

と、いう訳で更に１０分後……。

や、やっと元に戻せた……。カインと協力したけど大変だった……。だって何故かオカマに目覚めたり、不良みたくなったり、やたら気弱になったり……。

リリとサネスさんドン引きだったよ、特にオカマ化した時。リリとか怯えて『嫌あぁぁぁ！！こっちくんな～～～～！！！』とか凄い叫んでたし。

いや～、でも元に戻せて良かった。

「リリちゃん……なんで離れるの？」

オカマ化した時の記憶がないリッドさんがリリに聞いた（トラウマになったら困るからこっちで消去した。一回何もかも忘れたのは秘密。）。

「……変態。」

「なぁ、サネス……俺、何か変な事したか？」

「お前は覚えてなくてもリリは覚えてるんだ。もちろん俺も覚えているぞ。」

「マジか！？俺、一体何をやらかしちまったんだ！？全然思い出せねえ……。」

そんなリッドさんに私は言った。

「リッドさん……世の中には知らない方がいい事もあるんですよ？諦めてください。」

「嘘、俺、そんなに酷い事したの？」

まぁ、ある意味最低だけど……いや、あっちの世界にはニューハーフなんてごまんといるんだ。別にこの世界にいても不思議は無い……ハズ。

しかし、リリにその事を聞くと、

「え？女性の心を持った男？そんなの聞いた事ないけど……兄様、知ってる？」

「いや、知らん。お前らの世界にはそんな訳のわからん人種がいるのか？」
うーん、この世界にはニューハーフなんていないのか……。となると……。
「リッドさん、やっぱり知らない方がいいです。そのときのあなた、最低でした。」
「ま、マジでか……。」
あ、落ち込んじゃった……。しかし、その後、自分で立ち直った。うん、良かった。
さぁ、本題に戻ろう。道に迷った。
リッドさんは移動魔法使えないし、私は一回試してみたけど、５人運ぶのは魔力足りなくなって失敗したし、カインにも無理だったし……。
うーん、せめて魔力があればいいんだけど……あ。
「そうだ、リッドさん、あなた、他人に魔力分け与える事できますか？」
「できるけど……それがどうしたの？」
「私に魔力を送って、私の魔力を増大させれば、魔力が足りるかもしれません。カインも魔力送って。」
「はいはい。」

そうして二人に魔力を送ってもらう。お、魔力が凄い増えたのが分かる。これならいけるかも。私は叫んだ。

「よし、いける！！瞬間移動！！」

バシュウウン！！

突然、視界が真っ白になり、気がつくと……。

「つ……着いたぁ……。」

やった、集落に着いた。と、いきなり深い眠気に襲われ、私はふらついた。カインが体を支えてくれる。

いくら魔力を送ってもらっても負担が大き過ぎた……眠い……。

私はカインに倒れかかり、睡魔に身を任せ、そのまま眠りについた。

第２８章　帰り道で（後書き）

次回はカイン視点の予定。うーん、誰か忘れているような……。

気のせいですよね。うん。

第２９章　青年の苦しみ（前書き）

今回カイン視点。

読み直して思った。このままでは確実にカインよりもメレンのほうが主人公っぽくなる。

あと誤植が多すぎる。言ってるを言っるとか、こっちをこつちとか、ヒューマノイドをヒューノマイドとかｅｔｃ……。

ＤＳｉ生き返ったら修正する予定。え……？誤植が分かってるんならさっさとやれ？……Ｗｉｉでは面倒過ぎるんです。許してください。

という訳で、今回も、ゆっくりしていってね！！

第２９章　青年の苦しみ

俺は倒れかかったメレンを受け止め、心配して声を掛けた。

「おい、大丈夫か？」

「すー……すー……（寝息）」

……寝てる。魔力の使いすぎだろう。いくら2人から魔力もらっても負担が大きかったようだ。

……にしても……。

あ～～～～！！やっぱ可愛いな！！

こういう場じゃなかったら抱きしめてたかもしれない。それほどの可愛さだ。

と、とりあえずおぶっていこう。俺はロリコンじゃない俺はロリコンじゃない大体メレンは年上だし大体メレンは年上だし俺は普通俺は普通俺は普通俺は普通俺はノーマル俺はノーマル俺はノーマル俺はノーマル……（下心を必死に隠そうとする純情な青年の自己暗示）。

１０分後……。

よし、落ち着いた。メレンをおぶって歩きだした。メレンは軽い（小さい）から助かる。

……背中に当たる柔らかな感触がなんとも……。

……て、違う違う！！俺はそういうことを期待してメレンをおぶったんじゃない！！！！（メレンは身長の割りに胸がかなり膨らんでる。）

うおぉ！！落ち着け！！！！平静を保て！！！！俺は普通だ！！！！ノーマルだ！！！！

ヤバい、もう一度自己暗示しよう。俺は普通俺は普通俺は普通俺は普通俺は普通俺は普通（全部書くと１００行ぐらいになるため以下略）……。

更に１０分後……、

はー……、はー……、クソ、メレン相手にここまで……。

「おーい、カイン？お前さっきから大丈夫か？病気か？」

リッドさんが心配そうに声をかけた。……これはある意味病気だろう。

「……ねぇ、兄様、カインはあんな風になってどうしちゃたの？」

リリちゃんの問いにサネスさんは、

「うーん……お前もカインぐらいの年になればきっと理解できるさ。今のお前にはまだ早い。」

「ふーん……。」

……この気持ち理解されたらドン引きされるんじゃないだろうか。頼む、リリちゃん、理解しないでくれ。できれば俺達が元の世界に帰るまで。元の世界に帰るまでに理解されたら心が折れて修復不可能になる。

いや、今の時点でかなり引いてるけど。そのせいで心が痛い。あと肩と腰も痛くなってきた。何故だろう。

「うみゅう〜……。」

……メレンがまた可愛らしい（ここ重要）声を……メレン、頼む、頼むから、一生のお願いだから、いや、一生のお願いですから、これ以上俺を苦しめないでください……。

いや、俺が勝手にもがき苦しんでいるだけなんだか、メレンがあまりにも可愛すぎるからだ。美しさは罪とかたまに聞くけど、可愛さも十分過ぎる程罪だと思う。

もう、ダメだ……俺ではとても手に負えない……。

「リッドさん、代わってください。俺はもうダメです。お願いします。」

俺はメレンを下ろして、リッドさんに押し付けながら言った。

「え？別にいいけど……何かあったの？」

俺はあえて何も言わなかった。メレンの可愛さに〜なんて言えない。

余談だが肩と腰が痛い訳がわかった。メレン背負ってたからだ。あ

んなに軽くても結構負担になるんだと知った。
「さ、行こうか。」
そうしてジャ……ではなくて、族長様の家に向かって２０分後……。
「う……うーん……。」
「あ、起きた。」
メレンは目を覚ますと、おぶってもらってるのに気づいて、それがリッドさんだと分かると……。
「嫌ぁーーーーーー！！！変態ーーーーーーー！！」
いや、酷くないか？確かにキザっぽい見た目してるけど。
メレンはリッドさんを蹴り飛ばして背中から降りると、リリちゃんに泣きついた。
「うわーーん！！汚されたぁーーーーー！！」
「……は？」
リッドさんが唖然となった。サネスさんが冷ややかに言う。
「リッド……お前、彼女いるだろ？酒場の看板娘の、名前は」
「言うな！！バラすな！！」
「再来月結婚するんじゃなかったのか？」
「それもバラすんじゃねぇよ！！大体なんでお前が知ってんだよ！？」

「いや、こないだ酔ってた時にベラベラ喋ってたが。」

「畜生ーーーーーーッ！！！！」

で、リリちゃんは、そんなリッドさんを冷ややかな目で見ていた。俺とは比べ物にならないくらい引いている。

「なんでそんな目で見るんだよ！？やってないのわかってんだろ！？」

だが、リリちゃんは、サネスさんの後ろに隠れてしまった。

「来んな、変態。」

「うあぁぁぁーーーーー！！！！」

リッドさんが絶叫した。

この後、メレンの誤解を解くのと、リッドさんを立ち直らすのに、４０分かかった。あぁ、面倒だった。

余談だが、この騒ぎが他の人にも聞こえ、酒場の看板娘とやらにも伝わって、リッドさんの結婚はお流れになりかけたとか（その後、必死に説得して、なんとかよりを戻したらしい。）

なんか……今日だけですごい疲れた。

第２９章　青年の苦しみ（後書き）

リッドさんの扱いが酷くなった気がする。あとユドさんを完全に忘れてた。

……もうユドさんは居なかった事になるかも……。

第３０章　祝祭（前書き）

やっとＤＳｉネットにつながった……長かったぁ……。

でも“伝説の剣士”作成した時には既に直ってたりする。

今回も遅れてすいません。今後も遅れると思います（伝説の剣士と同時進行のため。）

あまり期待せずに待っててください（笑）。

今回カイン視点。……そろそろ～視点って言うの面倒くさくなってきたな……。

第３０章　祝祭

まぁ、あんな出来事もあったが、その後は特に問題も無く、無事、族長様の所まで辿りつけた。

ちなみにメレンはこの後リッドさんを避けて俺にくっついて歩いているが、本人は面白がっているのだろう（多分）。

リッドさんがドアをノックしてドアを開けると中に向けて言った。

「モモフフ討伐隊、只今戻りました。」

中から族長様の声が。

「そうか。ご苦労だった。それで、もちろんトドメを刺したんだろうな？」

「はい。これでこの集落を脅かす者はいなくなりました。」

「そうか！よくやったぞ！！ささ、入ってくれ！！」

俺達は招かれるまま中に入った。

「よくやったな。君達。君達６人は集落を守った英雄だ！」

あれ？６人？５人だった気が……って、あ。

ユドさんをすっかり忘れてた。いや～、ただでさえ影薄いし、途中から会話にも入ってこなくなったけど、１０日ぐらい忘れさられた

ままって……（リッドさん曰わく、昔からよく忘れられる人だったらしい。）

「特にお二人（俺とメレンだ。）君たちのおかげだ。礼を言うぞ。」

「……。」

メレンは複雑そうな表情で黙っていた。泣きそうにも見える。

「さぁ、祝祭をしよう。ゴルグ、ノーガ（族長の息子二人）、皆を呼び集めて準備を。」

「はい。」

と言って外に出て行った。

「あぁ、言い忘れていた。４人（リッド、サネス、リリ、ユド）よ。」

「……何でしょうか。」

サネスさんが言った。

「君達に礼として、特級剣士最上級ランクの給料３ヶ月分にあたる礼金を与える。」

「わぁ～～～！！ありがとうございます！！」

リリちゃんが嬉しそうに言った。どうやら額は相当なものらしい。

ふと外を見ると、たくさんの人が祭りの用意をして、既に結構用意ができている。

「さ、君たちも用意をしてきなさい。」

と言われ、俺たちは外に出た。そのまま祭りの準備を手伝う。

そして４０分後……

準備も終わり、ついに祝祭が始まった。俺達６人が英雄としてたたえられる。

ただ、俺はこういうのはあまり好きじゃないんだが。それでも、まぁ、悪い気分ではない。

メレンは小さい子供達に取り囲まれて、魔法を見せてとせがまれ、蛍の光のような明るい炎を空中に浮かべている。結構楽しそうだ。

リッドさんは綺麗な女の人と話をしている。さっき言ってた宿屋の娘だろうか。

サネスさんとユドさんは知り合いに囲まれ、体験談を話しているようだ。

リリちゃんは同年代ぐらいの女同士に囲まれている。……なんか剣術がどうとか言われてる。

で、俺は小さい男の子や若い女性から尊敬の眼差しで見られ、同年代の男子から、お前のようになりたいだの、いつかお前を倒すだの

（近くにいた女の子によると、俺が女の子に囲まれてるのに嫉妬し

てるらしい。）色々言われている。

いつか倒すとか言われても困る。どうせあっちの世界に帰るんだから、見逃してはくれないか？

なんて事をやってたら、あっという間に暗くなってきた。俺は今、中ジョッキ程の大きさのグラスに注がれた黒っぽい飲み物を飲むかどうか迷っている。

おじさんがグビグビ飲んで顔が赤くなってるから酒なのでは？しかし、その辺の小さい子供も普通に飲んでるし違うかも……。いや、この世界では飲酒に年齢制限はないのかもしれないし……。

しかし、メレンの方を見ると、確信。これは酒だ。顔が赤くなり、もはやグデングデンになってる。

「おい、大丈夫か？」

明らかに普通じゃないメレンを心配して、俺は声をかけた。

「らいりょうふよ、らら、りょっとろりすきりゃったかひら……（大丈夫よ、ただ、ちょっと飲み過ぎちゃったかしら……）。」

全然大丈夫じゃねぇ。まともに発音ができてない。明らかに酒の飲みすぎだ。

「お前、どのくらいこの飲み物飲んだんだ？覚えているか？」

「ほろふらふれはんらいふらい……おいひはっははらふい……（このグラスで3杯ぐらい……美味しかったからつい……）。」

……これ以上飲まさないほうがよさそうだ。夜も遅くなってきたし、もう寝かしてやろう。

俺はメレンをなんとか宿屋のベッドに乗せ、寝かしつけた。宿の主人には後で言っておこう。

ふわぁ……俺も、眠くなってきたな……。

第３０章　祝祭（後書き）

次回は……まだどっちにするかは未定。

ろれつの回ってないメレンの台詞見ているとオ〇ドゥル語を思い出した……。メレンの台詞程酷くはなかった（多分）けど。

いや、“そんな事”を“ドンドコド”とか言ってたから同じくらい酷いか……？

第３１章　出発（前書き）

これからまた投稿間隔長くなるかもしれません。

理由

1、新規小説、“伝説の剣士”を同時進行するから。

2、高校の宿題、及び勉強が忙しくなるから（春休みの宿題のあまりの量で俺は一度死にかけた。これ実話。）。

まぁ、でも、それでも一週間に一回でできるかもしれないんですけどね。やってみなけりゃ分かりません。

今回カイン視点。

第３１章　出発

「おーい、メレン。気分はどうだ？」

「さ、最悪よ……うえぇ……。」

「少しは良くなったか？」

「ぜ、全然ダメ……おぇっ……。」

そしてボチャボチャと汚物を便器にぶちまける音。

「魔法でどうにかならないのか？」

「やろうと思ったんだけどさ……あまりに気分悪くて、それどころじゃな、おえぇっ……。」

どうやら魔力は、体調でも左右されるようだ。

俺は族長様に別れの挨拶をしに行こうと思ったのだが、メレンのせいでなかなか出発できないでいる。

そう、壮絶な二日酔いでメレンが苦しんでいるからだ。

起きた途端、足がふらつき、頭が割れるように痛んで、吐き気が止まらないらしい。……想像したくないなぁ……。

で、メレンは朝飯も食べずにトイレに籠もって、二日酔いの苦しみと戦っている。

お、やっと出てきた。しかし、顔が蒼白で、ふらついている。そして、ベッドに倒れ込んだ。

「うぅ……もうやだ……カイン、助けて……。」

「自業自得だろ、未成年なのに酒をガバガバ飲むから……。」

「お酒だって分からなかったのよぉ……いいから助けて……。」

なんか今にも泣き出しそうだ。目がウルウルしてる。や、止めろ、そんなダンボールの中の子犬のような目で俺を見るなあぁ！！（あまりの可愛さに抱きしめそうになるから。）

……とりあえず助けてやろう。治療の魔力を手に込めてメレンの背中をさする。蒼白だったメレンの顔に赤みがさしてきた。どうやら効果はあるようだ。

3分後……

「どうだ？気分は？」

「うん、だいぶよくなったよ。ありがと。」

「じゃ、族長様へ挨拶しに行こうか。」

「うん。」

40分後……。

「もう、出発するのだな。」

「はい、ありがとうございました。」

「礼を言うのはこっちの方だ。言葉では表せられない程感謝している。もちろんこの集落のみんなもだ。全員を代表して礼を言う。本当にありがとう。」

「それでは、もう行きます。本当にありがとうございました。」

「あぁ。元気でな。」

そうして、俺達は外に出た。４人がそこで待っていた。

「もう、行くんだ。」

リッドさんが言った。

「はい。短い間でしたが、本当にお世話になりました。」

「じゃあな。また、会えるといいな。」

「はい。」

「……元気でな。」

サネスさんが言った。

「はい。いままでありがとうございました。」

「じゃあね。これからも頑張ってね。」
リリちゃんが言った。
「あぁ。いままでありがとう。」
俺がそう言うと、リリちゃんは頬を赤らめてサネスさんの後ろに行ってしまった。
メレンも同じように挨拶と礼を言った。
「それじゃあ、お世話になりました。」
「ああ。気をつけてな。」
こうして、俺達は集落を後にした。
「さ、城に戻って報告しようか。」
俺が言うとメレンも、
「それに、また情報を集めないとね。次どこに行けばいいのかも分からないんだし。」
と、メレンも答える。
「よし、そうと決まれば早速行こうぜ。」
「うん。」

こうして俺達二人は城に向かって歩き出した。

［リッド視点］

俺らはカイン達を見送った後、家に向かいながら色々と話していた。

「いやー、それにしても楽しかったな。」

俺が言うとサネスも、

「楽しいと言うのは少し違う気もするが……まぁ。退屈はしなかったな。」

「楽しいって、あたしは2回ぐらい死ぬって思ったよ……。」

「あはは、本当に危なかったよね。リリは。」

リリも笑ったが、どこか寂しそうだ。どうしたんだろう。

「リリ。」

「ん？何？兄様。」

リリが言った。

「お前、好きだったんだろ？カインの事。」

「！！なんで分かったの！？」

「何年お前の兄やってると思ってるんだ。お前の思ってる事ぐらい簡単に分かる。元々お前、顔にでやすいしな。」

「うぅ……。」

「そして、お前は思いを伝えられなかった事を後悔してる。違うか？」

「……。」

「もう会えないと決まった訳じゃない。また会えるかもしれないだろ。その時に思いを伝えればいいさ。それまで女を磨いておくんだな。」

「……うん。」

こうして、俺達は、家へと帰っていったのだった。

第３１章　出発（後書き）

リリちゃんがカインに思いを伝える事はできるのか。それとも心の奥にしまい込んだまま、ずっと会えずに終わるのか。……まだ決めてません。もし気になるのならただひたすら待ってください。カインとリリちゃんが再開して、思いを伝えたら前者、会えずにエンディングだったら後者。

まぁ、興味ある人いないと思いますが……。

それはそうと次回から２ｎｄシーズンに突入です。と言っても急展開とかはありませんが（予定）。

次回もカイン視点。

あ、やっべ、またユドさん忘れてた……。書いた後気付いた……。

……もう、ＤＳｉの容量無いから（リッド視点入りきるか焦った。）書き直しとかはしません。

べ、別に面倒くさいんじゃ、ないんだからっ！！

第３２章　出会い（前半）（前書き）

今回メレン視点。いい加減これ書くの面倒になってきたなぁ……。

あと、今回、終わり方が中途半端です。はい、いつもの容量不足です。すいません。

第３２章　出会い（前半）

ははは、もう、どうしようもないね。これは、仕方ないよ、うん。しょうがない。

……コイツいきなり何言ってんの？と思っている方の為に説明しよう。“道に迷った”。以上。

もうしょうがないよね。方向わかんないんだし。わかんないのに下手に動いたら余計に道に迷うっていうのは身を持って体験したから（ＤＧ蹴り飛ばした時）、二の舞する訳にもいかないし、瞬間移動使おうとしたら、魔力足らずに失敗したし、もうこれは

「現実見ようぜ？」

「はい、すいません。」」

ゴメン。半分ヤケになってた。はぁ……。

あぁ、もうイヤ。歩くの疲れた。何日何時間歩いたことか。なのに一向に着きはしない。

太陽の動きで方角を知ろうと思ったが、改めて太陽見ると、なんともキテレツな動きをしている。

真っ直ぐ動いたと思ったら急に９０度曲がって、しばらくしたらさらに９０度曲がって……という様な動きだ。さっぱりわかんない。

想像してほしい。東から昇った太陽が９０度カーブを三回繰り返し

て東に沈む様を。私は初めて見た時、目がおかしくなったのかと思ったよ。カインは魔力の副作用か何かで幻覚が見えるようになったのか？と言ってた。

しかも毎日どこから昇ってどこに沈むのかわからないからタチが悪い。なのに昇る時間と沈む時間は決まっている（季節によって違うのかは不明。）。

……ヤバい。城に帰るどころかこの森から出られるかっていうのも怪しくなってきた。もしかしてここで怪鳥（カインを襲ったあの鳥）か何かのエサになるの？

……ヤダヤダヤダ絶対ヤダ！！

と言ってもどうしよう……ん？

「ねぇ、カイン？何か聞こえない？」

「は？……確かに。何だろ。」

「……何か鳥が羽ばたくような音が。」

「……人の声……叫んでる……？」

え？……という事は？

「人が……襲われてる？」

「いや、そんなまさか……。」

「……行ってみる？」

「まぁ、念のため……。」

と、声の方へ走ってみると……。

「……げげっ！！（2人同時に）」

ヤバい、本当に人が襲われているよ。カインぐらいの年の青年がカインが襲われたと言う怪鳥3頭に。木刀みたいなのを振り回しているが、かなり危ない。

「かなりヤバそうだ！！加勢するぞ！！メレン！！」

「えぇ！！」

「うらあぁぁあ！！」

カインが剣で一頭の翼を斬った。私は飛び蹴りでもう一頭を吹っ飛ばして木に叩きつける。これでこの二頭は逃げていった。

あと一頭は私達を警戒し、青年の方に襲いかかった。青年は所々から血を流し、かなり危ない。

ヤバい。と思ったその時、

ズバァァァッ！！

鎌鼬のような空気の渦が鳥に命中し、翼を切り裂いた。驚いた鳥はほうほうの体で逃げていった。

そして、そこには一匹の子狐が。もしかしてこれが真空波を……？

カインが言った。

「おい、子狐。お前、アニマロイドか？」

「よくわかったね。外見は普通なのに。」

狐が……喋った。まぁ、犬も猫も喋ったから、今更驚かないけど。

「アニマロイドは固有の能力がある。そうだろ？」

「そう。僕はこの真空波が使えるんだ。ＣＴセンパイみたいなロケットパンチが良かったけど。」

「センパイ……？お前、ナンバーは？」

「アニマロイド、ナンバー１０２５。［ＦＸ］。」

やっぱりＦＯＸのＦとＸか。

「そんなにアニマロイドっていっぱいいるの？」

これは私のセリフ。

「いろんな所でペットとして飼われてるよ。まぁ、空き巣防止が殆どらしいけどね。」

「で、こっちの青年は？」
「異世界から連れてきたんだ。王様の命令でね。」
「ふーん……は？」
え、もしかして私達と同じ？
「どうやら君達も同じのようだね……臭いがこの世界と違う。」
「君、名前は……。」
「ジェルス。ジェルス？ノバール。君たちも拉致されたのか？」
「あぁ。何も聞かされず。君は？」
「俺もだよ。いやー、まいっちゃうね。一緒に来いって言われたと思ったら青い渦の中に押し込まれたんだよ。」
「ははは、同じだ。」
私も笑った。が、ジェルスは私を見ると、笑うのを止めた。
「ん？お前、どっかで……。」
「え？私？見間違いでしょ？」
「もしかして……マチル家の令嬢か？」
「いえ、違います。」

私は即答した。……面倒な事になりそうだ。

第３２章　出会い（前半）（後書き）

次回もメレン視点。

第３３章　出会い（後半）（前書き）

なんだか書き足らないから前回投稿後、即執筆開始。今回メレン視点。

第３３章　出会い（後半）

「いえ、違います。」

私は即答した。こいつは以外。まさか私の事を知っているとは……。

確かに私は“令”嬢ではない。ワガママ娘だ。令嬢はお姉ちゃんの方だろう。いや、お姉ちゃんもワガママ娘か。

「でも……メレン？エグナ？マチルじゃないのか？」

……ミドルネームまで知ってるとは……父さんの友達の息子とかか？

「確かにメレン？マチルですが、“令”嬢ではありません。ただの娘です。」

「いや、しかし、俺の親父がマチル氏の友人で、親父は、“ラグド（私の父さんだ）の所のメレンちゃんはとても礼儀正しい令嬢の鏡のような子だ！お前も見習え！！”……と。」

黒髪で高身長、筋肉質で結構な男前なのに、こういうのを熱弁。こういうのはちょっとなぁ……。

「あぁ……私客人の前では凄い猫被ってたからなぁ……。」

「……。」

ジェルス、無言。まぁ、令嬢の鏡と思ってたのがこんなワガママ娘だからな……。

で、その時カインが、

「メレン……お前……。」

「あぁ、アンタには言ってなかったね……私はマチル家……とある町の町長の娘。」

「え？という事は町長の娘を小学生扱いして馬鹿にしたという事でＳＰみたいなのから始末されるんですか？」

「敬語使わなくていいよ……私は普通の女の子がいいの。そんな敬意示されるの大ッ嫌いだからさ、いままで言わなかったの。」

「じゃあ始末とかは……。」

「する訳ないじゃん。ＳＰなんてうざったいだけだし。」

「ああ、良かった。」

カインが安心したようにいった。マジで始末されると思ってたらしい。

「で、ジェルスとか言ったっけ。アンタも城に行くの？」

「あぁ。こいつが言うには。」

「じゃあ一緒に行こうよ。実は私達道に迷っちゃって、この子（FX）なら道知ってるでしょ？」

「あぁ、そうだな。いいよな？FX？」

「別に僕はかまわないよ。」

「あ、そうだ。」

ジェルスのが思いついたように言った。

「助けてもらった礼をまだ言ってなかったね。ありがとう。助かったよ。」

「そういえば、怪我、大丈夫？」

「大丈夫だよ。痛いけどね。」

「動かないで、治療するから。」

ジェルスに魔力を送り込む。すぐに血が止まり、傷が塞がった。

「ありがとう。楽になったよ。……そういえば、俺も魔法使えるのかな？FXは俺に魔法の素質があるって言ってたけど。」

「念じればできるだろ。」

カインが言った。それを聞いてジェルスは何か念じるように目を瞑り、そして……。

「ハァッ！！」

ズパァッ！！ドーーーーン！！

目の前の樹木が斬れた。そして斬れた部分が地面に落ちて轟音を立てた。

「ひゅー（口笛）。スッゲ。」

ジェルスが感心したように言った。

「さて、そろそろ行こうぜ？」

カインが言った。

「そうだね。えーっと……。」

「カイン。カイン？セプル。」

「カイン。よろしく。」

「あぁ。」

「よろしく、メレン。」

「よろしく。」

と、言う事で私達は歩きだした。で、道中の会話。

「そういえば、メレン。君って、１７……だよね？」

「うん。よく知ってるね。」

「親父が言ってた。にしても、こんなロリ体型で俺より一つ年上って……。」

私はすぐさまジェルスの顔を掴み、徐々に力を込めた。

「一言多いわよ……？」

普段より声にドスをきかせて私は言った。

「あああ……す、すいません……痛い痛い、ごめんなさい許してください離してくださいお願いしますアーーーーッ！！骨がーーーッ！！」

「それくらいで許してやれよ。」

「いや、あとちょっとだけ。」

もう少し、もう少しで骨にヒビが……。

「何危険思想してんだよ！？マジヤバいから止めろって！！」

「……はーい。」

仕方なく私は手を離した。

「はー、はー、死ぬかと思った……。」

その後、ジェルスはしばらく真っ青な顔で震えていた。

……少し、悪い事しちゃったかな？

第３３章　出会い（後半）（後書き）

次回、ジェルス視点。拉致されるまでの回想。

第３４章　経緯（ジェルス編）（前書き）

今回先に謝っておきます。

すみません。

ごめんなさい。

申し訳ない。

今回かなり、いや、最高に読み苦しいと思います。

～理由～

1．書きたい事全部書いたのに容量余りまくって、それを埋める為、必死に水増しした（書きたい事全て書いても４０行ぐらい余ってたんだよ畜生めーーーーーー！！）。

2．俺の精神状態が劣悪（罰ゲームで女子に向かって「もう離さない、絶対に……。」と言わされた。泣きたくなった。あともう一つ言わされたのだが、それは書かない。心が折れるから。）。

3．元々の俺の文章力が無に等しい（読んでればわかるハズ。）。

という訳で、今回酷い出来なのですが、これから精進するので、許してくださいおい馬鹿何をする止めろ！！

止めて！！石投げないで！！殴りかかってこないで！！暴力反対！！！

な、何をするダァーーーー！！ウギャァァァァァ！！！

１０分後……

初めてですよ。この私をここまでコケにしたお馬鹿さん達は……

……。

ゆ、許さん……絶対に許さんぞ！虫ケラあ、止めてくださいごめんなさい暴言吐いたり虫ケラ呼ばわりしたのは謝りますから許してください。

止めて！！某最低校長のように描写不能な程ボコボコにするつもりか！？

うわぁぁぁぁぁ！！

ー力尽きました－

残念わたしの冒険はここでおわってしまった！！

異世界の危機、完。

……という夢を見たんだ。

出来が酷いのは確かなので、ご了承ください。おい、正夢にする気かやめろ。

今回ジェルス視点です。長々と馬鹿な茶番に付き合ってくれてありがとうございました。

という訳で、今回も、ゆっくりしていってね！！（ゆっくり〇夢風に）

第３４章　経緯（ジェルス編）

「今日はここまで。みんな、さっさと帰れよー！！」

「さようならー！」

ふぅ……やっと授業が終わった。毎日毎日こんな事の繰り返し。実につまらない。何かこう、珍しい事でも起きないだろうか。

……地震やハリケーンなんかの大惨事は御免だが。

「ジェルス！！何考えてるんだ！？早く来いよ！！」

「あぁ！！今行く！！」

俺はそう言って荷物をまとめる。そして俺の親友、ミックの元へ走った。

「また“面白い事でも起きないかな”とか考えてたのか？」

「あぁ。よく分かったな。毎日毎日ワンパターンでつまらないったらありゃしないよ。もっと非日常的な事が起こらねぇもんかな？」

思えば、ここでこんな愚痴こぼしたからあんな事になったのかもしれない、と思う。

「アハハ、この辺は珍しいもんは何もねぇからな。退屈になるのもわかるよ。」

そんな事を喋りながら、俺達は帰り道を歩いて行った。それにしても、他にも友達はそれこそ腐る程いるのに、帰り道が同じなのはミックしかいない。

まぁ、俺やミックの家は町外れの方にあるから仕方ないのだろう。

しばらくして、俺達はコンビニに寄って、飲み物を買う。

俺達の高校、登下校中に何か買っても全然お咎めがない。私立だからなのかもしれないが、随分ヌルい校則だ。

そんな訳で飲み物を飲みながら歩いていると、人里ではめったにお目にかかれない動物が。

「あ、狐。」

「どこどこ？」

「今草むらの中。ほらあっち。あ、道路に出てきた。」

「？……どこだ？道路に出てきたのか？」

コイツは何を言っているんだ。どう見ても正面にいるじゃないか。

狐は近づいても逃げなかったため、俺はその狐を抱きかかえた。

「ほれ。狐。」

「……ジェルス。お前、大丈夫か？狐なんて全然見えないぞ。」

「……は？」

嘘だろ？見えない……だと？

「……マジで？」

毛皮のフサフサした感触もあるのに？

「……俺、疲れてんのかなぁ……。」

「お前、最近、勉強頑張ってたからな。疲れで幻覚の一つや二つ……。」

いや、ヤバくね？幻覚て。いくら疲れていても幻覚は異常だろ。

「……今日は俺、早く寝るわ。あまりに疲れてるようだ。」

「あ、あぁ。」

それだけ聞くと、俺は全力で走って家まで帰った。もちろん狐を抱えたまま。

１０分後……。

着いた。俺の家に。俺は家の中に入って、とりあえず狐をおろす。

そうして頬を思いっきりひっぱたいてみる。うん。普通に痛い。夢じゃない。狐も消えてないし。

いや、むしろミックの方がおかしくなったのでは……？感

触だってあったんだ。アイツの盲点（人間の目の見えない部分）に偶然狐がいたのでは？

……それはないか。

「なぁ、狐よ。お前は実在してるのか？それとも幻覚か？」

俺は思わずこんな馬鹿な事を呟く。すると思いもよらない事が起こった。

「幻覚じゃないよ……他の人には見えないだけさ。」

……あれ～？おっかしいな……今度は幻聴？

「違うよ。僕が話しているんだよ。」

……狐が……喋った。

「……どういう事だ？他の奴には見えないって……。」

「話せば長くなるけど……簡単に言うと僕はこの世界の存在じゃないんだ。そして、僕のいる世界には魔法がある。だから魔力を持たないこの世界の住民には僕の姿は見えないんだよ。」

「何故」

「“俺には姿が見えるんだ？”でしょ？答えは簡単。至って簡単。君に魔力があるから。」

「魔力ってなんだ？」

「魔法を使うエネルギーの事だよ。僕らの世界の住民は全員持っている、まぁ、使いこなせない人も多いけどね。普通、この世界の人には魔力が無いんだけど、何故だか知らないけど持っている人が極々々稀にいるんだ。君もその一人。だから、僕の姿も見える。」

そして、俺は最も聞きたかった事を聞いた。

「お前……何者だ？」

「僕はアニマロイド。改造動物だよ。コードネーム［ＦＸ］。よろしくね。」

アニマロイド……？改造動物……？

「お前達の目的は？」

「僕らの姿が見える人をあっちの世界に連れて行く事だよ。今、僕らの世界が結構ヤバくてね……君達に助けてもらいたいんだ。」

……信じられねぇ……異世界……？

「さぁ、行こうか。」

目の前に大きな青い渦のような物が現れた。

第３４章　経緯（ジェルス編）（後書き）

書きたい事書いて尺余りまくったから水増ししたら今度は尺が足りなくなった……。阿呆ですね。ハァ……。

次回もジェルス視点。また尺が余りそうだ……。

第３５章　拉致（ジェルス編）（前書き）

遅れてスマヌ。

今回ジェルス視点。

三週間くらい更新しなかったんで、前回の展開忘れたから読み直したけど……

思ったのはただ一言。

“これはひどい”。

まあ、自分で読み返して毎回毎回思っている事なんですが。

文章力が……ねぇ。

……これから文章力向上の為、努力します。

……ゆっくりして（ｒｙ

第３５章　拉致（ジェルス編）

目の前に青い渦が発生。そして狐が一言。

「さぁ、行こう。」

「行こうって……その、異世界にか？」

「そう。かなりヤバいんだ……急がないと。」

「いつ帰ってこれる？」

「さぁ？君次第だとおもうけど。」

「なぁ、どうしても行かないといかんか？」

すると、狐はイライラしたように言った。

「いいから早く！この世界とあっちの世界じゃ時間の流れが極端に違うんだ……ここで5分過ごしただけであっちでは１０年たっているんだよ……。」

「え？という事は今、こうしている間にも、異世界の時間は瞬く間に過ぎているって事か？」

「そう、寿命は時の流れに比例してここの世界の人達より圧倒的に長い。しかし、という事は、もし、世界が支配されたら、その支配が何千年、何万年と続き、人々は何千、何万年と苦しめられるんだ……だから早く。心配はいらないよ、君の寿命もあっちの

世界では圧倒的に伸びるからね。つまり、あっちで１０年過ごしても、君の寿命は５分しか縮まらないから……。」

「……わかったよ……行くよ。」

「よし！！じゃあ、飛び込んで！！」

「あぁ。」

不安はある。しかし、こうなってしまったら仕方ない。その異世界とやらに行ってやろう。時の流れが違うから、あっちで３０年過ごして戻っても、こっちでは１５分しかたってないから行方不明とかいう事態にはなるまい。しかも、肉体の成長も極端に遅くなるから、帰ったらみんな変わってないのに自分は大人、というのもないんだ。死なければ問題ない。

俺は青い渦に飛び込んだ。

……。

……気持ち悪ッ！！

いままで感じたことの無い程の気分の悪さだ。ヤバい、吐きそうだ……。

～１０分後～

はぁ……はぁ……やっと落ち着いた……。

ここは……森？

「そう。ここは森の中。さっさと城にいこうよ。王様がまっているよ。」

「おい、狐……ここが……異世界か？」

「うん。魔法が存在し、魔物と人が共存、あるいは敵対し、そっちの世界で言う妖精、精霊、悪魔なんかがいる世界……まあ、妖精だの悪魔だのは、人種の一つだから、君たちと同じ“ヒト”である事は間違いないよ。」

「魔物と人が敵対……ということは、襲ってくるんだな？」

「種族にもよるけどね。まぁ、用心にこした事はないよ。ほれ。」

と、どこからか木刀のようなのを取り出す狐。

「無いよりマシでしょ？」

「まぁ……。」

で、一番聞きたかった事を。

「どこへ向かえばいい？」

「言わなかったっけ？城だよ。王国のお城。」

「道は？」

「僕にはレーダーが付いているからね、わかるよ。距離は１６４３

０ゴナ。方角はこっち。」

「ゴナ……？」

「距離の単位。１ゴナ＝１００ゲナ。１ゲナ＝１００グナ。」

「いや、さっぱりわからん。」

「まぁ、遠いってのは確かだよ。１０日ぐらいかかるかな？」

「そんなにか……。」

「歩かないとはじまらないよ。早く行こう。」

と言って歩き出す。しょうがない。ついていこう。

７日後……

……疲れた……。ちっとも景色変わらないからつまらん事この上ない。

大体、毎日毎日１０時間も歩くのは今時の若者にはつらすぎる。東洋のブシとかいうのはサンキンコウタイとやらで何時間も歩いていたらしいが。

……足が重い。“ハッ、甘いな”とか思った奴、一週間続けて１０時間歩いてみろ。

と、その時、

「何か聞こえる……羽ばたきの音かな？」

「は？」

バサッ、バサッ、

確かに聞こえる。上から？

見ると3羽の大きな鳥がこっちに飛んでくる。うわー、迫力あるなぁ……。

いや、そんな事言ってる場合じゃなくね？こっちを襲うつもりでしかなくね？

「これは戦うしかなさそうだね……気をつけて、アイツら1羽でもかなり強いからね……それが3羽となると……苦戦は必至だよ……。」

「マジかよ……そんなのが……。」

これは……大変そうだ……。

第３５章　拉致（ジェルス編）（後書き）

どうも、Ｙｏｕｔ○ｂｅでＡＣロボの動画見て大興奮してた官崎です。

さて、今回のスーパー言い訳タイム！！

俺、官崎は今更ながらモ○ハン３ｒｄ（とＰ○Ｐ）買いましてね、それに夢中になってました。

うん、リオ○ウスに消し炭にされたり、ウラ○ンキンに潰されたり、イ○ルジョーに喰われたり、前途多難ですが、楽しくハンターライフを送っております。

そしてオトモア○ルー可愛い。特にプー○ーとロデオなんて癒やしの極みだよ。

はい、要はこれの投稿めんどくさかったんです（時間的な意味で）。本当にごめんなさい。

さて、ボッコボコにされないうちに

スタコラサッサだぜ～。

我が友「上から来るぞ！気をつけろ！！」

ゑ？

あれ？なんで上から人が？そして表情が怖いんですが。

え、ちょ、やめっ！！

チイッ！！戦うしかないのか！？

フンッ！！こっちだって戦う事くらいできるんだよっ！！

これでもくらえッ！！

ダンッ！！（しこを踏む音）

突っ張り圧力砲（パッドほう）！！

ドガガガガガガ！！

ワーッハッハッハ！！どうだ！！この作者権力！！職権乱用！！バーソ○ミュー？くまの技なんて朝飯前よ！！

ガシャン！

え？もしかして、これ、海○石？

……ヤバくね？

うわあぁぁぁぁ！！！

てーーれーーれーーれれーーー（た○しの挑戦状でゲームオーバーしたときのＢＧＭ）

～その後、官崎の姿を見た者はだれもいなかったという～

という妄想をしてみる。

……次回もジェルス視点。あらかじめ言っておく。戦闘描写はカインがやったので、戦闘描写はナシ！！ご了承を。

次回も、ゆっくりしていってね！！

第３６章　違和感（前書き）

自分の小説読み直してとんでもない誤植に気がついた。

ＶＳモモフフ（その１）でリッドさんの台詞、「気をつけろよ、」が、

「昨日をつけろよ、」になってました。

これに気付いた時１人で大爆笑だったよ。そして、読んでた人には意味がサッパリだったと思うので、

すいませんでした。

いや、でもね、ＤＳｉで入力する時、携帯で文章打つ時と同じくこれから来る文字の予想が出るんだけど、“気”と“昨日”が近くにあって、それでタッチスクリーンのズレで“昨日”になっちゃって、それに気づかなくて

（キングクリムゾン！）

という訳なんですよ。

他にも誤植はあると思いますが、見つけ次第訂正し、前書きで説明、謝罪するので、ご了承を。

今回カイン視点。

キングクリムゾンを知らない人は検索してください。有名なネタだから知らない人少ないと思いますが……。

それでは今回も、ゆっくりしていってね！！

第３６章　違和感

ジェルスと出会ったその夜、それも相当遅く、俺はなかなか眠れずにいた。

“疲れ過ぎると逆に眠れなくなる”と友達が言っていたが、その通りのようだ。二人はぐっすり寝ているけど。

月明かりのおかげで辺りの様子がよく分かる程明るい。星が綺麗だ。太陽と同じく奇妙な動きをしているが。

俺は何気なく辺りを見渡し、ある違和感に気付いた。

メレンが妙に見づらい。ジェルスはハッキリ見えるが、メレンは黒……なんだか夜の闇に紛れているように見える。

しかもその姿が揺らいでいるような……気のせいか？

俺はメレンの頭に触れ……られなかった。すり抜けてしまった。しかもメレンの形が段々崩れていく。闇に溶けていくようだ。

俺は心配になり、メレンに声をかけた。

「メレン？」

「……ん……ん……何？起こさないでよ……ふわあぁ……」

急にメレンが元に戻った。崩れかけていたのは一瞬で元に戻り、黒

っぽかったのが普通に戻った。

「メレン、お前……形が崩れかけてたぞ？」

「……は？」

「色も黒っぽくなって……まるで闇に溶けていくようだった。」

「……へぇ……すぅ……。」

コイツ、寝ぼけてて絶対聞いてねぇな。……もういい。朝、もう一度話そう。

「いや、やっぱいい。……ゴメン、起こしちゃって……。」

「うん、じゃ……おやすみ……。」

「あぁ。おやすみ。」

俺はメレンの髪を軽く撫でながら言った。

……俺も眠くなってきたな、やっと眠れそうだ。

俺はそのまま目を閉じて、眠りについた。

〜7時間後〜

「起きて、カイン。もう日が高く昇ってるよ？」

「ん……あぁ。おはよう。」

「珍しいね。私より遅く起きるなんて。」

「昨日、なかなか眠れなかったからな。」

ジェルスはとっくに起きていたようで、もう準備している。

「なぁ、メレン。」

「ん？何？」

俺は夜の事をメレンに話した。

「そんな事が……全然自覚なかったけど。」

メレンはこう答える。

「妙だね……普段魔法は寝ている間勝手に発動したりはしないんだけど……魔力が漏れるのは聞いた事あるけど、こういうのは起こらないハズ……。」

これは狐。

「じゃあ、前代未聞の事がメレンに……？」

これはジェルス。そして狐が

「しかも闇に溶けるって……こんな伝説の魔法、古代の呪術

書に記されているだけで、使ったっていう……いや、使えたという報告は過去1億年は無い……。」

「今まで誰も使えなかった伝説の魔法を私が発動させたって事？しかも前代未聞の寝ている間に。」

「ま、そういう事になるよ。」

……なんか不可解だなぁ……。

「メレン。その魔法、ちょっとやってみてくれ。」

「うん。分かった。」

メレンが目を閉じて集中する……しかし、しばらくして首を振った。

「出来ない……。」

それを聞いて俺は、

「無意識でできたのを意識して出来ないって……念じ方が足りないんじゃないか？」

「そうかなぁ……？」

再び目を閉じ、集中するメレン……しかし、

「駄目、どうやっても無理。」

「そうか……。」

ますます謎だ。伝説の魔法を寝ている間に無意識で発動させるという前代未聞の事をやってのけたのに意識して使えないって……。ん？

「……メレン？」

メレンの様子が変だ。目が虚ろで、こちらの呼びかけにも反応しない。目の前で手を振ってみるが、無反応。

肩を揺さぶって声をかけてみる。

「メレン！！」

「カインが呼んでるから……」

「は？」

コイツ、何を言っている？頭沸いてんのか？あ、元に戻った。

「ゴメン。ぼーっとしてた。」

「カイン、今のは何だ？」

「さぁ……、でも、モモフフと戦ってた時も何か変だったな。」

「そうか……。」

コイツ、一体何者なんだろう……？

第３６章　違和感（後書き）

どうも、ソロでア〇ツマガツチ倒してテンション上がりまくった官崎です。

今回、まぁ、あまり気にしなくていいです。メレンがかなり異端になったような気もしますが、多分、いや、絶対に気のせいでしょう。

次回、メレン視点。ジェルス視点を望んでいる人はいないと思うから、もうちょい先でいいよね？

ジェルスの出番はこれからメッチャ増やす（予定）。

さて、書く事無くなったな。書き足らないのに。何書こうかな？ゲームとかアニメの話題は著作権に引っかかるのが怖いからそこまでやりたくはないからなぁ。

勉強つらい。ＧＷの宿題多すぎワロタ。

あ、やべぇ。この話題こっちの心が痛くなる。止めよう。

単車欲しい。まだ１６になってないけど。１６になったら即刻買いたい。あ、でも免許冬休みにならないと取れないや。

……よし、書き足りた。この辺で終わりにしよう。終わり方が酷くて叩かれそうだけど、別にいいや。異論は認める。

それじゃあ、今回はここまで。

次回も是非、ゆっくりしていってね！！

第３７章　到着（前書き）

今回メレン視点。

前書きで書く事ねぇよ……ネタ切れだ……。

第37章　到着

（お前、寝ている間にそんな事やってたのか？）

“私”が聞いてくる。

え？あなたがやったと思ったんだけど。

（確かに私にはお前より莫大な魔力を持っている、しかし、そんな寝てる間に古代の魔法を発動させるなんてできねぇよ。）

だとすると……やっぱり私が……。

（しっかし、解せねぇな……お前の魔力の量も魔法の強さも魔法のプロ程度なのに、そんな事が……）

ねぇ、前から思ってたんだけど。

（ん？）

あなた、一体何者？

（言っただろ？私はお前だ。お前は私。）

にしては、私より遥かに強かったり、あっちの世界にいたのに、この世界や魔力について詳しかったり、どういう事？

（さぁ？なぜでしょう？）

もう、ごまかさないで答えてよ。

（言っただろ？お前と私は反対。お前が素直なら、私はひねくれる。お前の根が優しいのなら、私は腹黒い。お前が素直だから、私はこんな風。）

全く……。

「メレン？」

「カインが読んでるから……」

あ、声に出ちゃった。

（さぁて、私はもう寝るとするか。お前の彼氏が読んでいるみたいだし。）

ち、ちょっと！！そんな関係じゃ……

（おやすみ～。）

……内側の自分をぶっ飛ばすにはどうすればいいんだろう……

……魔力で気でも送るか？

（無駄だよ。内側の自分を殴るなんて無理無理。大体自分自身なんだから、自分で自分殴るようなもんさ。）

……畜生。

（ほら、さっさと構ってやりな。お前の彼氏がすねちゃうかもよ？）

……覚えとけよ……。

「あ、ゴメン、ぼーっとしてた。」

……以上が私が“私”と対話した内容。心での対話って想像するより早く済む。“私”の言葉も、内側から聞こえてくるというか、脳に直接伝わってくるような感じ。

で、その後も色々話したが、結局まとまらず、今は気にしないで進もう、という結論に達し、私達は再び歩き始めた。

……というのが3日前の話。

あともう少し、もう少しで着くんだ……頑張れ、私……。

そう、疲れに疲れ、足がメッチャ痛い。誰か、この痛みだけでも……代わりに歩けとは言わないから……。

……そうだ。前みたいに“私”に痛みを受け流せばいいじゃん。

（おい！！止めろ！！）

よし、即実行。魔力で痛みを受け流す。

（バカヤロオォォォォーーーーーー！！！）

あ～、楽になった。

何か聞こえた気がするけど、気にしない。多分空耳だろう。

ガッ！！（躓く音）

ドタアッ！！（転んだ音）

ううっ……いったぁ……。

（くはは、ザマァ。）

カインが私に声をかける。

「おい、メレン、大……丈夫じゃねぇな……」

は？

「いや、大丈夫なんだけど。」

するとジェルスも、

「いや、大丈夫じゃない。あの……直視できない事態に……。」

……まさか。

恐る恐る顔を触る……湿った感触が……。

手をみると真っ赤。

思いっきり鼻血出てた……カッコ悪……。

〜5分後〜

「大丈夫？付いてない？」

魔法で血は拭った。鼻血自体も止めた。私はカインに血が残って無いか聞いた。

「大丈夫だって。付いてないから安心しろ。」

「本当に？」

「ああ。」

なら、いいか。

「よし、もうすぐ森を抜けられそうだ。」

ジェルスが言った。よし、もう少しで……

森を、抜けたーーーーーーーー！！！

と、思ったら、高い高い崖の上。まぁ、わかってたけどね。

しかし！前回のようにロッククライマーよろしく降りて行く私じゃない！！

ジャーンプ！！

「おい、アイツ、大丈夫か？」

「大丈夫。」

上で何か話しているが気にしない。ちなみに前がジェルス、後がカインに聞こえた。

着地寸前で上昇気流を起こし、無傷で着地。

「ほらー！！2人とも早くーーー！！」

崖の上の2人によびかける。

2人は顔を見合わせ……同時に飛んだ。ものすごい勢いで落ちてくる。

「うあぁぁぁぁ！！」

「うおぉぉぉぉ！！」

二人が叫びながら落ちてくる。私は上昇気流で2人を着地させた。

「さ、行こうか。」

「あ、あぁ。」

そしてしばらくして私達は、遂に、城下町の街門にたどり着いた。

第３７章　到着（後書き）

どうも、最近家でネコが一番偉く見えてきた官崎です。

早速ですが、次回は、今更ながら人物紹介（主人公格の３人）と用語の説明をしたいと思います。

まぁ、内容はいままでに無い程少なくなりそうですが、すぐに投稿できると思います。

そういえば高校の友達にこの小説の事を話した所、

「女子の嘔吐シーンは自重しろ。」

とのことだったので、これからは極力嘔吐シーン無し、あっても表現をぼかそうと思います。

まぁ、メレンの嘔吐シーン見たい人なんていないよね？

という訳で今回はここまで。

それでは、人物紹介でも、ゆっくりしていってね！！！

オマケ　登場人物紹介（その１）＆ａｍｐ；用語説明（前書き）

こういうのをオマケの時に言うのもどうかと思うんだけど……

……

“先生……タイトル変更が……したいです……

……。”

え？どっかで聞いた事がある？気のせいでしょ？

カインとジェルスのミドルネームはこれで初公開だよ。

それでは、オマケでも是非、ゆっくりしていってね！！！

オマケ　登場人物紹介（その１）＆ａｍｐ；用語説明

☆人物紹介☆

カイン？ムラン？セプル

身長　１６７ｃｍ　体重　５０ｋｇ　血液型　Ｂ型　誕生日　９月１３日　年齢　１６歳　好きな物　野球　スポーツ中継

今作の主人公。ごく普通の高校生だったが、ＣＴと出会ったのをきっかけに、異世界に拉致される。

髪が長い上、やや童顔なので女子っぽく見える。本人はこれを非常に気にしており、少しでも男っぽく見られるようにと、言葉づかいをやや荒くしている。小学生の時、短髪にしたらカッコ悪いと言われ、それから髪を長くしている。

運動神経が良く、野球を始めとした球技が得意。また、成績も良く、テストでは好成績を残している。

性格は明るく、行動的。他人思いな一面も。又、小さい女の子（メレン含む）に非常に弱く、周囲からはロリコン疑惑がたっているが、本人は否定している。異性に対する免疫があまり無く、年上の女性（メレン除く）と話すのは苦手。

武器はロングソードを使用。魔法も使えるものの、あまり強くはない。

メレン？エグナ？マチル

身長　１３３ｃｍ　体重　不明　血液型　ＡＢ型　誕生日　５月２５日　年齢　１７歳　好きな物　甘い物　小動物

今作のメインヒロイン。とある町の町長の娘。しかし、本人は平凡な所が良かったと思っている。ＤＧと出会い、異世界に拉致される。

非常に身長が低く、よく小学生と間違われる。身長に行くべき栄養が行ってしまったのか、かなり胸が大きい（Ｅに近いＤカップ）。サラサラした黒髪とクリッとした目がとても可愛らしい超美少女で、学校でもかなりの人気がある。この低身長にかなりのコンプレックスを抱いており、この事をからかった男子をボコボコにした事があるらしい。

見た目によらず、運動はかなりできる。西洋人だが柔道もやっており（父親に護身術として教えられたらしい）、ナンパ師は柔道か男の弱点を蹴り上げる事によって撃退している。

性格は非常に明るく、無邪気。又、非常に甘えん坊（本人は否定している。）で、姉のサリノによく甘えていた（シスコン）。

魔法がかなり得意で、多種多様の魔法を操る事ができる。ただし、短時間で魔法を使い過ぎると眠ってしまう。

ジェルス？ギロ？ノバール

身長　１７７ｃｍ　体重　５３ｋｇ　血液型　Ｏ型　誕生日　１１月３０日　年齢１６歳　好きな物　炭酸飲料　スリル

本作の準主人公。カインと同じく極普通の高校生。退屈をかなり嫌

っており、異世界への拉致も、面白い事が起きないかと考えたせいなのでは、と密かに思っている。父親がメレンの父親の友人。

綺麗な黒髪、長身、筋肉質のかなりのイケメンで、学校の女子から人気が高いが、とんでもなく鈍感で、全く気がついていない。むしろ、全くモテていないと思っている。

運動神経は学校ではトップクラスで、体育では全種目で高成績を残している。特に得意なのはサッカー。ただし、カインとは違い、勉強は殆どできず、成績は赤点スレスレ。

性格は心優しく、頼まれたら断れないタイプ。弱い者を平気で傷つけたり騙したりする者には激怒し、容赦しない事も多い。又、女性にやや甘い部分がある（ただし、女性でも激怒した際には甘さを無くす。）

武器はやや短い刀の二刀流。魔法もそれなりに扱う事ができる。

☆用語説明☆

異世界

文字通りこちらの世界とは異なる世界。魔法、魔力が存在し、人種に悪魔、妖精などがいる。食べ物はこちらの世界とはかけ離れており、奇妙な物が多い。又、こちらの世界のと異世界の人間では味覚が違う。更に、極端に時の流れが早く、異世界で１０年過ごしても、こちらでは５分しか経過していない（あの３人がほぼ同じ時に異世界に着いたのは偶然）。

魔法

異世界で使える読んで字の如く魔法。基本的に心の中で念じる事によって使用できる他、口に出す事でも発動可能。発動には発動者の体内、もしくは空気中の魔力を消費するが、空気中の魔力を利用できる者は少ない。又、体内の魔力が、使おうとする魔法の消費魔力より少ないと失敗して、不発になる他、発動者にダメージが発生する場合もある。異世界の住民なら誰でも使えるという訳ではなく、むしろ使えない者の方が多い程。魔法は基本的に何でもできるが、死者の蘇生、世界の滅亡などはできない。魔法には個人によって得意、不得意があり、例えば、火が得意なら、水が苦手、などがある。魔法を短時間に連発すると、体に負担がかかり、睡魔に襲われたり、筋肉痛に近い症状が出る場合もある。

魔力

魔法を扱う為に必要なエネルギーのような物。前述の通り、発動者の体内にある者と空気中にある物の2種類ある。

オマケ　登場人物紹介（その１）＆ａｍｐ；用語説明（後書き）

ごめんなさい。容量が限界だったので、続きはここに書きます。

魔力の続き

空気中の魔力を用いて発動する魔法は、体内の魔力で発動するものより強くなる。更に、空気中の魔力を利用する場合、体に負担がかかりにくい。

アニマロイド

異世界の政府が作りあげた改造動物。生身の動物を改造してサイボーグに近いものにしている。改造された動物は知能が劇的に上昇し、言語を理解し、話す事ができる。更に、それぞれに武器が搭載され、エリートだと魔法を使える者もいる。名前はコードネームであり、“ＣＯＯＤ［○○］”となる。改造された動物の殆どは、知能上昇、戦闘能力追加などを喜ぶ者が多い。しかし、住民の中には動物の命を弄んでいるのではと、批判の声も上がっている。

完全型人造人間（パーフェクトヒューマノイド）

政府が製作している異世界の危機を救うべく作られる人造人間。アニマロイドのように、人間を改造したり、機械にする訳ではない。見た目は普通の人間そのもので、食事、排泄、睡眠など、普通の人間と同じように生活できるという。成長、老化もあり、果てには生殖能力すら持っている（人造人間同士でしかできないのか、普通の人間とも交われるのかは不明）。病気にもかかる。最大の特徴として、非常に高い戦闘能力を持っている。見た目が人間そのものなの

は、怪しまれないようにするため。実は、テストタイプは既に完成しており、どこかで生活しているらしい（ちゃんと生活が送れるかどうかテストしている。）

以上。ふー、短くなるとか言っておきながらメッチャ長くなった……。

……今回はここまで。次回はジェルス視点。

それでは、本編でも、ゆっくりしていってね！！！

第３８章　いざこざ（前書き）

……本当に遅れて申し訳ありませんでした。

ごめんなさい。

申し訳ない。

心の中は謝罪の気持ちでいっぱい。

権限エラーにネットの接続不良にその他個人的トラブル、嫌になってました。正直失踪しようかと思っていました

でもね、以前言ってたんですよ。失踪はしないって。だから回線が復帰しエラーも直ってようやく戻ってこれました。

もちろん、長い間更新ストップしてたのは反省しています。本当に申し訳ありませんでした。

今回、ＤＳｉからではなく、３ＤＳから投稿しております（３ＤＳでも権限エラーが直らなかった）。容量が上がっていると良いのですが……。

今回、ジェルス視点。

それでは、久しぶりに、ゆっくりしていってね！！！

第３８章　いざこざ

「待て！！お前ら！！」

町を歩いて十数分。俺達は何故か呼び止められた。見ると明らかにガラの悪そうな兄ちゃんと、何故か憤怒してるように見える中年のオッサン。後ろには“その他大勢”と思われるいかにもしたっぱに見える男達。

ガラの悪い兄ちゃんが叫ぶ。

「テメェ、この前はよくもやってくれたな！！今度はたっぷりと可愛がってやるから覚悟しろ！！」

で、オッサンの方が、

「テメェのせいで俺は他の奴等に冷たい目で見られるようになったんだ！！絶対許さん！！」

と言う。ちなみにどちらもメレンに向かって叫んでる。何かあったのだろうか。

「カイン、メレン。お前ら、こいつらと何かあったのか？」

と聞くと、二人はしばらく考え込んで、同時に、

『……誰？』

……は？

見ると、あっちの二人もずいぶん驚いているようで、

『な、お前ら、俺の事を忘れたのかぁーーーーーー！！？』

と、同時に言った。

しかし、カインとメレンは忘れている事を悪いと思っていないらしく、

「だって、あの後いろんな事があったから……なぁ？」

「うん。あれに比べたら全くどうでもいいような事だったと思うし……。」

どうやら相当どうでもいい事だったようだ。

「ううぅ……クソッ！！テメェらにとってはどうでもよくてもこっちはそうじゃねぇんだよ！！」

「そうだ！！お前らのせいで、俺はとんだ恥をかいた！」

うーん……何があったんだろう？

「あ。」

カインが何か思い出したようだ。

「そっちのガラの悪いのは路地裏でメレンにナンパして返り討ちにあって、オッサンはメレンに手ェ出そうとしたロリコンじゃねぇか。

」

「１２歳以上なんだけど……。」

つまりメレン目当ての奴等か……。ということは……

「おぉ、メレン。だとしたら、お前の可愛さは異世界でも通用するって事じゃねぇか。」

「えへへ、ありがと。」

「ハハハ（笑い声）」

「うふふ。」

あれ？なんでこんな和やかになってんだろ……？

「テメェら！！俺達を無視するんじゃねぇ！！」

……そうだった。この不良共と対峙してたんだった。

「もう許さねぇ！！バカにしやがって！！お前ら！！やっちまえ！！！」

オッサンがそう言うと後ろの取り巻きが一斉におそいかかってきた。

「おいおい……一斉に来るのかよ……。」

カインがそう言うと、メレンも、

「本当に面倒だよね……。」

と、相槌をうち、俺も、

「本当に、高校生相手にここまでやるかな……普通……。」

と言う。そして、

『まぁ、何人で来ようが、一緒だけどな（だけどね）！！！』

三人同時に言った（“（　　）”内はメレン）。

不良の四人が、真っ先にメレンへ向かって行った。どうやら弱いと思ったようだ。五人が、男子にしてはお世辞にも強そうには見えなかったのかカインの方へ向かう。残りの五人は、俺だ。

しかし、予告したように（三人同時に言ったアレ。）圧倒的だった。カインは剣を鞘に入れたまま振って二人を瞬時に昏倒させ、二人を拳一発ずつで気絶させ、もう一人の腹にパンチを喰らわせる。この間、五秒弱。

メレンは不良のパンチの片手で受け止め、思いっきり蹴り飛ばす。魔力も使っているのだろう。一人巻き込んで思いの外飛んでいき、街路樹のような植物に激突した。更に一人の腕を掴んで、素早く一回転させるように投げ飛ばす。あれは……東洋の護身術だっただろうか？それをもう一人の男に叩きつけ、二人を気絶させた。十秒程で終わった。

一方俺は、メレン同様にパンチを避けると、そいつと、近くにいたもう一人の頭を掴んで、思いっきり頭同士をぶつけた。ゴンッ、と

鈍い音が響き、二人は気絶。一人の胸ぐらを掴んで投げ飛ばして、噴水の中に投げ入れ、二人は延髄に手刀を叩き込んだ。こっちは十秒掛からなかった。

さて、雑魚は全員始末した（無論、死人はゼロ。）あとは不良とオッサンのみ。こちらが挑戦的に睨みつけると、オッサンが、

「う、うわあぁ！！」

と言いながら逃げていき、不良の兄ちゃんは

「チッ……覚えてろ！！」

と言いながら逃走。勝てないと悟ったんだね。

「ははは、ざまーみろ☆」

ある意味今回の元凶であるメレンが楽しそうに言った。暴力行為だったため、結構残酷にも見える。

「……さ、行こうか。」

カインがそう言って、歩き出した。

第３８章　いざこざ（後書き）

どうも、今は５００ｍｌペットボトルジュース一本分の金も無い、官崎です。

久しぶりでしたが、相変わらずの文章力に、自分でもびっくりです（無論、悪い意味で。）。

それにしても、男女トラブル、テストの成績、自転車のギアの故障、白アリなど、本当に悩み事が多くて困っています。

……うん、これを更新遅れた理由にするつもりはありません。本当にごめんなさい。

なるべく遅れを取り戻せるよう、頑張ります！！

次回は……、メレン視点かなぁ……。

次は、なるべく早く投稿するので、待っててください。

それでは次回も、ゆっくりしていってね！！！

第３９章　城に到着（前書き）

俺、この投稿が終わったら……アイツに告白するんだ（もちろんウソ）……。

今回メレン視点。

それでは、今回も、ゆっくりしていってね！！！

第３９章　城に到着

さて、不良達をあっさりと片付けた私達は、さっさと城に向かう事にした。

ちなみに、私達が気絶させた不良達はその場に放置している。別に問題はないだろう。野次馬が数人回収してたし。

ふー、歩きっぱなしとさっさの喧嘩ですごく疲れた。さっさと城に行って、報告して、風呂入って、寝よう。

（さっき私に痛み受け流したのにもう疲れただぁ？）

うるさい。今時の女の子はか弱いんだ。ちょっとした事で疲れるんだよ。

（ああ、そうかい。）

そうそう。だからお前はさっさと寝ろ。

（はいはい。わかったよ。じゃ、お休み。）

はーい、お休みー。

ふぅ。さ、行こ。

３０分後……。

や、やっと……着いた……。

門兵が、こっちに気がついて、声をかけた。

「あ、あなた方は……。」

「はい、王様に話があるので……通していただけませんか？」

カインがそう言うと、すぐ通してくれた。

私達が城を歩いて数分、

『きゃーーーーー！！！』

……メイドか。

私は大勢のメイドに囲まれ、あれよあれよとカインとジェルスから離されていく。

「ジェルス……　アイツどうする？」

「放っておいていいんじゃないか？俺達だけで報告すりゃあいいだろうし。」

「助けてよーーーー！！！」

手を振って離れていく二人。畜生、あとで覚えとけよ……。

「さ、行きましょうか。」

メイドの一人が言った。私は逃げようとしたが、囲まれているので

あっさり失敗。

と、ここで私はある事に気がついた。メイドの数がやたら増えている。前は二十数名だったのが、今では四十人くらいにまでなっている。

「あの……増えているのって……。」

「えぇ。あなた（可愛い子）が城にいると聞いて、沢山来ましてね……。あいにく、あなたはさっさと出かけたんですけど、いずれ戻って来ると言ったら、ここで働くと……」

あぁ、そうかい。私目当てかい。もういいよ。覚悟は決めたよ。

新しく入ったと思われるメイドの一人が言った。

「さ、楽しませてもらいますからね……。」

やっぱ止めてぇ〜〜〜〜〜〜〜！！！

その後、私が解放されたのは、辺りがすっかり暗くなってからだった。

……ハァ。

第３９章　城に到着（後書き）

どうも。ただでさえクソ暑い夜なのに、エアコンも扇風機もなく熱帯夜を乗りきろうとしている、官崎です。

ずいぶん遅れたので、“毎日更新を一週間くらい続けてやる！！”などと思っていたのですが、高校の勉強が大変で、テストも近いため、なかなか更新できません。

遅れを取り戻せるのはずいぶん先になりそうですが、精一杯頑張ります。

次回はカイン視点。

それでは、次回も、ゆっくりしていってね！！！

第４０章　報告＆ａｍｐ；休息（前書き）

遅れてスマヌ。

忙しくて、なかなか暇がないんです。

某スマイル動画では年単位の更新ストップが許される例があったので、もうちょい遅れても別にいいかな？とか思ったんですが、

「それは中身の質が高いから。低クオリティーがそんなんだと駄目じゃなイカ？」

と、イカむ……じゃなかった。良心が囁きましてね。

まぁ、書くこと自体は結構楽しいんですよね。特に茶番劇やってる時なんかは。

時間がかかるんです。途中に入れる会話やネタを考えるのにもたくさん時間かかってるし、、グダるのも結構長いんですよね。

休みの日は大概疲労回復でボーッとしていてやる気が起こらない。

平日は割とやる気あるけど忙しくてできない。

……そんな俺ですが、これからも頑張ります。

今回カイン視点。ずいぶん久しぶりな気がする。

それでは、今回も、ゆっくりしていってね！！！

第４０章　報告&休息

俺達からどんどん遠ざかりながらメレンが叫ぶ。

「助けてよーーー！！！」

俺達はメイドの大群に連れ去られたメレンを見送り、王様の元へ報告しに向かった。別にメレンが居なくても支障はないだろう。多分。

と、いう訳で俺達二人は玉間へと向かった。

～移動後～

「おぉ、そなたも異世界から来たのか……。」

王様がジェルスに向かって言った。今更だけど、俺達、異世界から来たんじゃなくて、異世界の動物畜生に“拉致された”んだよな……世界の危機なら拉致もやむ無しという事か？

「えぇ……まぁ……そうですね……。」

ジェルスがそう答えた。ジェルスは異世界に行く覚悟を決めてからあの転送の渦に飛び込んだらしいが、そもそも、その時点でジェルスに残っていた選択肢は“異世界へＧＯ！”しか無いのだ。覚悟決めようが決めまいが、異世界行き。これでは拉致と何ら変わらない。

その後、この調子で頑張ってくれなどと色々言われ、そのまま解散となり、俺達二人は三階へと向かった。

ジェルスの個室も用意してもらったらしい。ジェルスは珍しくメレンに張り付いていないメイドに案内され、部屋へと向かって行った。

俺も部屋に入り、剣と荷物を放り投げて、ベッドに横になった。

なんか……大分疲れたな……。

この世界を支配しようとしている奴等……一体何者なんだろう……。

俺はそんな事をぼんやりと考えていた。

そいつらの影響、つまり悪い魔力により、魔物達が凶暴化している……今回はその一体を倒した訳だが、これから、何をすればいいんだろう。凶暴化したのを倒していけば何か分かるのか？分からなかったら？

……考えていても仕方ない。俺は今できる事をやろう……。

俺は考えるのを止め、しばらくボーッとしていた。

「そういえば……ここんとこ風呂に入ってねぇな……。」

俺はそう呟いた。確かに長いこと風呂に入ってない。入るか……。

部屋を出て、風呂場へと向かう。えーっと、男はどっちだったか……、こっちだったっけ？……多分こっちだ。

俺は風呂場に入って、服を脱ぎ、体を軽く擦って、湯船に浸かった。

「はあぁ〜〜……。」

ちょうどいい温度のお湯が心地よい。俺はあまり風呂が好きではないのだが、こう疲れている時はいいものだ。

このまま眠くなってきたが、なんとか堪えて、風呂から上がる。今日はさっさと寝ようかな……。

部屋に戻ると晩飯が用意されていた。前から思っているのだが、いつ置いていくのだろう？

にしても……やっぱりゲテモノ揃いだ。なんだこれは？鶏と魚が融合して小さくなったようなのが丸焼きにされている。これだけではイメージが湧かないと思うが、これ以外にどう言えばいいのやら。

他にも、真っ黒な肉的なものがオレンジ色のスープにぶちこんであるものや、どうみても普通のサラダの色ではないサラダ（何使っているんだろう？）なんかがある。

しかもトドメと言わんばかりにブラッドメイド。なぜ毎回出てくるんだ？

とりあえず、食えるものを腹に納めて（黒肉とブラッドメイドは食えたモンじゃなかった。）お茶（的なモノ）を飲みながらぼんやりしていると、

ガチャ。

とドアの開く音。その時俺は眠気やだるさなどでひどくボーッとしてたため、ドアの方を振り返る事はしなかった。

とたとたと小さい足音がこっちに向かってくる。しかし、俺はなおも振り返らず、お茶を口に含んだ。

その時、突然後ろから肩に手を置かれ、

「ご主人様。」

「ブッッ！！！（お茶吐き出した音）」

びっくりした。むせた。俺はゴホゴホと咳を繰り返す。

「ご、ご主人様！？大丈夫ですか！？」

こうなった張本人……メイド服着たメレンが心配して声をかける。コイツ、頭でも打ったのか？

とりあえず落ち着いた後、俺はメレンに聞いた。

「お前……何のつもりだ？」

「メイドさん達にメイド服着せられた後その自分の姿を見たらこれ、可愛いって……」

「感化させられたのかよ。」

あれほど嫌がってたのに感化させられるって……。

「メレン……とりあえず、それ止めろ。」

「え？でもご」
「止めろ。」
そしたら、メレンは泣きそうな顔をして、
「そんな……酷い……。」
ヤバイ。泣いちゃうよ、これ。
「分かった。分かったから、泣くな。ただ、今日一日だけにしてくれ。」
そう言うと、メレンはパァッと表情を明るくして、
「ありがとうございます、ご主人様！」
と言って背中に抱きついてきた。顔が赤くなるのが自分でも分かる。
そして、背中に当たる柔らかく弾力のある感触が……し、しょうがねぇだろ、俺だって年頃なんだから……。
「あの……メレン？当たっているのは……。」
「嫌ですか？」
「いや、そうじゃないけど……。」
そう言うとメレンはクスクス笑いながら更に背中に押し付けてくる。
コイツ、ふざけてやがる……。

あんなこと言うんじゃなかった……と今更ながら後悔している。

……ハァ。

第４０章　報告＆ａｍｐ；休息（後書き）

はろろ～ん☆飼いネコにちょっと高いエサを食べさせたら安いドライフードをあまり食べなくなってかなり後悔してる、宮崎です。

本当に最近暇が無いため、更新は不安定気味になります。春辺りに週一とか豪語してたけど、最近の更新状況を考えると、それは絶望的です。

……とか言いながらホラーもどきの投稿開始したんですが。あっちはここより更に不安定で、酷い時はそのまま放置ってのも……。

もう放置してるのが２つあるので、復讐の投稿くらい、ちゃんとしたい。

次回は、復讐のほうの投稿したいから更に遅れるかも。

次回……誰視点にしようかなぁ……ジェルス？メレン？まだ未定。

余談だけど、馬鹿な事書き終えると（今回でいう後半のアレ。）俺は何をやっているんだろうっていつも思います。書いている時はかなり楽しく書いているんですが。

更新は今までのようにはいかないかもしれないけど、できる限りがんばる！！

それでは、次回も、ゆっくりしていってね！！！

第４１章　準備（前書き）

これからは、更新急ぐ！！

と、いってもどうなるかわからないのですが。

今回ジェルス視点。

それでは、今回もぜひ、ゆっくりしていってね！！！

第４１章　準備

久々の風呂とベッドにより幸せな気分で朝を迎えた俺は、いつの間にか置かれていた朝飯を見て、一気にテンションが下がってしまった。

蛙と魚を足して２で割ったようなのがそのまま丸焼きにされている。黒に近い灰色の液体に、黄色いスライム状の何かがうかんでいる。更に台所でよく見かけるアイツのようなのが素揚げにされている。俺、コイツ大嫌いなんだよなぁ。

と、いう訳で朝飯に全く手をつけなかった俺は、旅の準備をする事にした。そういえば、メイドたちがやけに興奮して何か話していたが、何があったんだろう？……ま、いっか。

まずは服。この世界に来た時、おれは学校から帰宅直後だったため、今は制服だ。

狐に連れてもらって倉庫に来た俺は、とりあえずカインが着ているのとあまり変わらないレザーマントのような物を選んだ。あまり似合ってないように見えるが……。

武器は……軽く素振りをして一番しっくりきたやや短い剣二本で。狐によるとずいぶん珍しい戦闘スタイルらしい。

準備は完了。で、これからどこへ向かうか、という事なのだが、しばらくして起きてきたカインによると、酒場で聞くと言う。高校生が出入りしていいのか？

まあいい。とりあえず夜まで時間潰そう。何しようかな？カインは何故か寝てるし、メレンはメイド達に引きずられてどっか行ったし……。

城の中、探検するか……。

～3時間後～

さて、ここはどこだ？だだっ広くてよくわかんねぇぞ？倉庫のようだが変な色の薬みたいなのがたくさん置いてある……。

まぁ、この城一本道ばかりだから引き返せばいいだろう。

～1時間後～

あれれ？ここはどこだ？余計訳わからん所に出たぞ？薄暗い通路のような場所で奥に台座みたいなのがある……。

ん？あれは何だ？台座に細い棒状の物がささっている……剣か？

俺は興味本意でそれを取ろうとした。

バチィィン！！

な、何だ！？この剣に、弾かれた！？手を見ると、軽く血が流れている。何だ、この剣……。

「おーい！誰かいるのかーーー？」

この声は……あの猫か？猫が俺に気づいて声をかけた。

「お前は確か……カインの仲間の……。」

「あぁ。ところで猫、あの剣何だ？」

「さぁ？よく知らないけど地獄の魔力が秘められた魔剣だって聞いたことがある……力があまりにも大きいから封印されてるんだと。」

そうか……そんな剣なのか……。

「で、俺道に迷ったんだが、道教えてくれないか？」

「別にいいけど……じゃ、付いてきな。」

やっと戻ってこれた……。長かった……。

俺に気づいたメレンが声をかけた。

「あ、ジェルスー、どこ行ってたの？」

「あぁ、ちょっとな。」

「よし、行こうか。酒場に。」

カインがそう言って、さっさと歩き出した。

さ、行くか。酒場に。

第４１章　準備（後書き）

皆さんわんばんこ！！読んでる時が夜じゃなくてもわんばんこ！！！官崎ですよ！！

できれば、さっさと次投稿したい。メレンを目立たせたい（個人的な好みで）。

そういえば今回カインの台詞一個しかなかったですね。主人公らしくなかった。次は多くしよう。

次回は、カイン視点？メレン視点？どっちか決めてないです。

それでは、ありがとうございました！！また次回、ゆっくりしていってね！！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1250p/

異世界の危機

2011年8月5日05時16分発行